

【電計2016年4月号】

【題名：東海道五三次ウォーク(1)】

随分と大袈裟なタイトルだが、これはあるプロジェクトの正式名称である。参加者を集めて旧東海道筋に沿って長い散歩を楽しもうというものだ。但し、参加したのは僕ではなく、友人の矢尾板操さんという人である。彼は元三菱東京UFJ銀行の行員で、僕が彼と初めて会ったのは三菱銀行新都心支店であった。ほぼ30年前のことで、行員とクライアントの人間がそれから長きに渡って、私的な交際を続けるのは稀なことらしい。彼は今故郷の山形県・米沢に居る。

その彼が何を思ったか、突然のように「東海道五三次ウォーク」に参加するという。そこで、僕は現代の「東海道中膝栗毛」だとばかり、彼にその体験記を書いてもらい、写メも送ってもらって、それをまとめることにした。先ず、彼の体験記の最初の部分を紹介しよう。「東海道53次ウォークに参加する。私のような怠け者にはうってつけの企画である。全行程が企画化されており、自分の足さえあれば、集合場所に行くだけで東海道を歩ける。どの道を歩けばいいかと余計な頭を使う必要は全くない。ガイドが名所と言われる所で全て説明してくれる。お昼もちゃんと用意されている。健康にもいいし、願ったりかなったりである。」僕なら自分で調べて歩くが、自ら怠け者であると言う彼には、確かにピッタリのプロジェクトのようだ。以後、彼の体験記を旅日記と呼ぶことにする。

旅日記によると、三つのグループがあり、彼が参加したグループは総勢30名ほどで、同じグループでは8割が女性だという。近年の女性は男性よりも元気で活発だ。「1月17日、集合場所は横浜駅近くの神奈川公園。そこに行くと、エアホン付のラジオが渡される。文明の時代だから、ガイドが遠くにいても声が聞こえる仕組みだ。簡単な準備体操のあと出発する。ちょうど9時15分」。現代のプロジェクトは時間に厳格である。いよいよ何から何まで用意された中高年の気まぐれ歩きが始まる。「今日の天気予報は最高気温12度。まずまずの条件だ。」

ここで「東海道中膝栗毛」の弥次郎兵衛と北八に登場してもらおう。正確ではないが、彼等二人が行く道筋と「東海道五三次ウォーク」がたどる道筋を出来るだけ比較してみようというわけだ。「膝栗毛」(岩波文庫)によると、二人は江戸の神田八丁堀の長屋から出発している。「膝栗毛」に言う。「山鳥の尾の長旅なれば、臍のあたりに打ちがえのかねをあたため、花のお江戸を立出るは、神田の八丁堀邊に、獨住みの弥次郎兵衛へといふのふらくもの、食客の北八もろとも、朽木草鞋の足も軽く、千里膏のたくわへは何貝となく、はまぐりのむきみしぼりに対のゆかたを吹きおくる、神風や伊勢参宮より、足引きのやまとめぐりして、花の都にむめの浪花へと、心ざして出行ほどに、はやくも高なはの町に来かかり、」。ここで「のふらくもの」とは、文庫本の解説によると「怠け者」のことだ。図らずも矢尾板さんが自ら「怠け者」と言うのと符合しているとは少しおかしい。ちなみに彼が「膝栗毛」を読んだ様子は全くない。その後、弥次さんと北さんは、品川、鈴が森、大森、川崎を経て、神奈川宿に着いている。この神奈川宿は江戸から歩いて東海道53次の3つ目の宿場だった。

旅日記によると、「最初は甚行寺。この寺は昔フランス公使館だった。次の本覺寺にはアメリカの公使館があった。次いで神奈川宿。」矢尾板さんはその間の今の街並みを書いていないが、おそらく小高いビルやマンション、一個建ての民家が建ち並んでいるのだろう。そして神奈川宿だが、「ここに田中家という宿場の料亭がある。高杉晋作やハリスも利用していたとのこと。坂本竜馬の妻・おりょうが明治7年から勝海舟の紹介で、ここで働くようになったそう。英語も話せ、月琴も弾くことのできた彼女は外国人の接待に重宝されたという。」ここであの「おりょうさん」が登場する。僕は彼女が英語を喋っていたことなど全く知らなかった。おそらくしばらく横浜で暮らしていて覚えたのだろう。当時としては英語を話す貴重な人材だったはずだ。しかも女性なのだから尚更だろう。

一方「膝栗毛」は神奈川宿の様子をこう語る。「ここは片側に茶店軒をならべ、いづれも座敷二階造り、欄干つきの廊下、棧などわたして、浪うちぎは景色いたってよし。」弥次さん北さんはこの茶店に入って酒を軽く飲んで居る。当時の東海道は海の波打ち際に沿っていた。その様子は歌川

広重の「東海道五十三次」にも描かれている。しかし時代が変われば風景も変わる。おそらく当時の面影を伝えるのは料亭「田中家」だけかもしれない。茶店で酒を飲む弥次さん北さんのはしゃぐ声がどこからか聞こえてくるような気がする。

旅日記は続ける。「晴天で空が抜けるように青い。ただ風が冷たい。古い商店街を抜けて歩き続けると天王町駅に出る。道をそれてお昼の会場の横浜ビジネスパークへ。高層ビル。その中でお昼のお弁当を広げる。ここに場所を借りて食事などは時代だと思う。」鉄道マップによると、天王町駅とは相模鉄道の駅だ。この私鉄の始発は横浜で、平沼橋、西横浜と続き、天王町が3つ目の駅になる。矢尾板さん達は横浜駅近くの神奈川公園から出発しているから、おそらく相模鉄道沿いに歩いたのかもしれない。そして、青空の下、周囲に高層ビルの立ち並ぶ横浜ビジネスパークで昼食とは気分がよかったろう。風が冷たいのが玉に傷というところか。

「保土ヶ谷に入り、助郷会所跡、問屋場跡、高札場跡、刈谷本陣跡、脇本陣跡、旅籠本金子家跡、茶屋本陣跡、等を見学。」この旅日記によると、保土ヶ谷宿は大名が宿泊する格の高い宿場だった。参勤交代の頃はさぞかし賑わったことだろう。僕が幼い頃の時代劇映画では決まってその様子が出てきてものだ。「下にい、下にい」という声で、旅人が道端で土下座する。映画では必ず空がよく晴れている。雨が降っていたらどうするのだろうか？と僕は幼いながらに思ったものだ。

「そのうち権太坂にさしかかる。上り坂だ。名前の由来は『新編武蔵風土記稿』によると、道端の老齢の農民に旅人が坂の名を尋ねたところ、耳の遠いこの老人は自分の名前を訊かれたと思い、権太と答えたためとある。また坂の上から見える神奈川の海(海岸線は今よりずーと内陸にあった)は大変美しかったそうだ。」

一方、弥次さん北さんは、神奈川宿から、子供と他愛のない悪ふざけをしながら、おもしろおかしい旅を続けて品野坂(横浜市保土ヶ谷区)にさしかかる。一方、旅日記は語る。「武相国境に境木地蔵尊がある。ここが武蔵の国と相模の国の境だそうだ。更に、焼き餅坂を抜け、品濃一里塚に。これは当時の面影を伝える貴重な一里塚なのだそうだ。そして今日のゴールである品濃中央公園(東戸塚)にたどり着く。約10キロ歩いたと思う。時刻は2時30分。」一人の脱落者もなかったようだ。グループの大半を占める女性達もほぼ5時間強ほどのウォークで、随分疲れたのではないか。

弥次さん北さんは「すでにはや、日も山のはにちかづきければ、戸塚の駅になん泊まるべしと、いそぎ行く道すがら、・・・」と戸塚宿まで先を急ぐ。実はこの二人は親子ほども歳が違う。弥次さんと弥次郎兵衛は役者であった北八に惚れ抜いて、男同士で江戸に駆け落ちしてきたのだ。幾つかの事情があり、そういう二人が借金までして江戸の神田八丁堀からお伊勢詣りの旅に出ってしまった。「膝栗毛」の作者である十辺舎一九は実際に東海道を歩いたのだらう。それぞれの宿場の様子がよく活写されている。宿場々々では、旅人への宿の呼び込みが活発で、その様子の描写がおもしろい。「両側より旅雀のおとりに出しておく留めおんなの顔は、さながら面をかぶりたるがごとく、真白にぬりたて、いづれも井の字がすりの紺の前垂れをしめたる」などと表現されている。

そして矢尾板さんの旅日記は次のように締めくくる。「昔を振り返りながら、その街道の現代の生活ぶりを生で見てきた(今まで全く知らなかった道を歩き、人々の息吹を感じながら歩いている)。温故知新である。無事全行程を歩いたという爽快感と満足感も得た。」

爽快感と満足感とはいい表現だ。今は白粉を塗りたくった宿の女の呼び込みはないが、「知らない街の人々の息遣いは至る所にある。僕も旅好きなので、そのようなことがよくある。例えば、前から歩いてくるおばあさんに道を尋ねると、殆どの場合親切におしえてくれるものだ。そして時折「どこから来たのかね？」と訊かれたりする。それがきっかけになって、おばあさんはその土地の昔を事細かに語ってくれたりする。

矢尾板さんの旅日記は東海道ウォーク・プロジェクトの終わりまで続く予定である。次回はどこから出発するのだろうか？僕はまだそれを聞いていない。彼によると、どこかで何人かが脱落するそうだ。このプロジェクトは決して楽なものではなさそうだ。脱落する参加者の感想を聞いてみたい気がする。

するが、おそらく「きつかった」、「辛かった」、「苦しかった」という言葉の繰り返しになるだろう。やはり「無事全行程を歩いたという爽快感と満足感」の心境を聞きたいものである。僕は矢尾板さんの次の旅日記を大いに楽しみにしている。

【電計2016年6月号】

【題名：東海道53次ウォーク（2）】

今回は東戸塚から藤沢宿までである。矢尾板さんの旅日記の初めにこうある。「前回、気軽にすべて企画された楽々歩きだから参加したと書いてしまったが、それだけで492キロも歩く気にはならなかったろう。どうして？と考えると、一つ思い当たる節がある。それは子供の頃から『広重の東海道五十三次の屏風2双』をよく見ていたことだ。米沢の我が家の和室にいつもそれが飾ってあった。子供心に、浮世絵に描かれた人々の活動、それが江戸時代の活動と知るのは後年だが、興味もっていたのかもしれない。前回はつい自分の表層意識だけで書いてしまったが、潜在意識に浮世絵の東海道が刷り込まれていたのかもしれない。」これはさもなりなんである。特に幼い頃の見聞は意識の深層で眠っているから、それが後年になって、彼に東海道53次ウォークに駆り立てたとしてもおかしくはない。

実は、そんな矢尾板さんは、昨年10月11日、日本橋から同じ企画ツアーで品川宿まで歩いている。旅日記は今年からなので昨年の分はない。しかし、今回の旅日記で、10月11日のウォークのことについておもしろいことを書いている。それを紹介しよう。「JR田町駅とJR品川駅の間に泉岳寺があった。今でも参拝客が絶えない。実は私は上杉の系統の人間で、反忠臣蔵の思想の持ち主である。毎年12月14日には、現在の当主・上杉邦憲様（はやぶさの開発に従事し、宇宙航空研究開発機構に勤務していた）の頭が痛くなり、本人は出社を拒否したそうです。米沢では『もう一つの忠臣蔵』が上演されるぐらい反忠臣蔵思想がいきわたっている。なぜなら、忠臣蔵事件当時の上杉の殿様の実父は吉良上野介殿だったからです。それに世間で言われていることとは逆で、とてもいい殿様だったらしい。赤穂の殿様の方が精神病だったのではないかとの説を信じている土地柄です。」僕は矢尾板さんの家柄のことは知っていたが、米沢でそれほど「反忠臣蔵の思想」が強いことは知らなかった。そのような土地に生まれて育てば、彼自身も「反忠臣蔵」になるのも頷ける。それにしても、上杉邦憲さんが、赤穂浪士の討ち入りの日、すなわち12月14日に毎年のように頭痛に襲われるというのは不思議なことだ。本人は最先端科学技術の研究者なのだが・・・

さて、今回の旅日記のことに移ろう。「2月14日、9時に東戸塚駅前に集合する。快晴。我々第一班は45名。駅前が狭いので品濃中央公園に移動する。」ここは前回のウォークの終点である。「今日の行程は約13キロと長い。旧東海道に入り、品農坂に急な斜面のアップダウンがある。ここで富士山の全容を見ることが出来た。雪をいただき、でんと座っている富士山を見ると、日本人としての血が騒ぐ。空気は冷たいが、太陽のもと、みんな歩速を上げる。気持ちのいい道である。」ここで前回上げた品農坂という地名が再び登場する。矢尾板さんに確認したところ、これは前回とは別の坂道だということ。それほど遠くない場所に同じ名の坂があるとは紛らわしい。しかしそこから富士の絶景がよく見えるのはいい。矢尾板さんならずとも血が騒ぐかもしれない。

矢尾板さんの旅は分刻みで更に続く。「11時55分、吉田大橋。この橋は広重の53次にも描かれており、左に折れると鎌倉へ、橋を渡ると八王子への道がある。ここは交通の要衝だったのだ。・・・そうこうしているうちにJR戸塚駅に着く。・・・戸塚宿の内田本陣跡、澤邊本陣跡を見学。ここは日本橋から歩き始めて約40キロの場所である。江戸を出て、最初の宿泊をする場所としては好立地の場所であった。戸塚宿では、旅人をとつかまえて泊めさせよ、といわれていたそうだ。」戸塚宿に本陣があったということは、ここは大名が宿泊する宿場だったということだ。何百人もの大名行列が到着した時にはさぞかし上を下への大騒ぎだったことだろう。それにしても、参勤交代の旅の

スケジュールは誰がどのように管理していたのだろうか？諸大名を直接指揮命令していたのは幕府の大目付だったと聞いたことはあるが、宿場の本陣及び共侍の宿の手配までしていたわけではないだろう。例えば、宿場の混雑を考慮して大名の江戸出立の日を決めていたのではないか。あとは各大名の使者が各宿場に出向いて予約して歩いたのではなかろうか。しかし、有力大名ともなれば、行列の男女の人数が多い。しかも、雨や雪が降ると、予定通りに歩けるとは限らない。行列の到着が大幅に遅れると、宿場の方でも気が気でなかったにちがいない。そこへいくと、現代の「東海道ウォーク」は、分刻みで目的地までアスファルトの道を歩いている。旅日記は続く。「12時38分、八坂神社に到着する。この神社は『お札まき』が有名だ。12時59分、富塚八幡宮に到着。次に『お軽甚平戸塚山中道行の場碑』。ここは仮名手本忠臣蔵の舞台になった所で、物語上の記念碑。この辺でも富士山がきれいに眺められました。14時21分、原宿一里塚跡。日本橋から11番目の一里塚ということは日本橋から44キロ歩いたということです。14時25分、浅間神社を参拝。その後、旧東海道を我々の方に向かって歩いてくる一団があった。高齢者が20-30人はいたろうか。我々と同じように逆方向に歩いている人たちだろうか。」矢尾板さんはやはりどこにいても富士山に眼が向くようだ。確かに彼の「潜在意識に浮世絵の東海道が刷り込まれていた」のかもしれない。そして、企画された「東海道ウォーク」とはいえ、元気な高齢者が少なくないようだ。

今回の旅日記の最後の下りはこうである。「その後はひたすら歩く。松並木跡を通り過ぎ、ゆったりとした下り坂を歩く。ようやく目的地の『時宗総本遊行寺』に到着。到着は16時5分。整理体操をして解散したのが16時25分。今日は約13キロ歩いたことになる。晴天にも恵まれ気持ちのいい日でした。但し、歩き慣れていない足が痛い痛い。」矢尾板さんはいよいよ足が痛くなってきた。それでも彼は歩き続けるにちがいない。今の矢尾板さんは富士の美しい姿を大いに楽しみながら歩いている。やはり幼い頃に見た「広重の東海道五十三次の屏風2双」を実際の富士に重ね合わせているのだろうか。しかも米沢生まれでそこで育った彼は「反忠臣蔵」思想の持ち主なのだ。現代の弥次さんは「膝栗毛」の弥次さんより遥かに知的である。ちなみに最終目的地は京都の三条大橋だそうだ。まだまだ先は長い。

【電計2016年8月号】

【題名：東海道53次ウォーク（3）】

矢尾板さんの旅日記は初めに言う。「昔は自分の足で歩くしかないと考えていたが、乗り物といえば、駕籠と馬があった。現代語訳東海道中膝栗毛・藤沢から平塚まで3里半の下りを読むと、弥次さん喜多さんは駕籠に乗っている。こういう箇所を読むと、現代文明の利器を利用したくなる・・・自転車、自家用車、タクシー、バス、鉄道、新幹線・・・いかん、いかん、最初の動機が昔に学ぶ温故知新であった。」矢尾板さんは「温故知新」という言葉で今の心境を語っている。しばらく眠っていた彼の心の奥の知的好奇心は「温故知新」であつたらしい。彼の旅日記はこう続く。「楽をしようという自分のそんな思いを破ったのは、添乗員からの参加の確認の電話であった。『明日藤沢駅北口に9時で大丈夫ですね！』その問いに『わかりました』と答える。ということで今日もがんばろうという気持ちになった。」矢尾板さん達が今回歩くのは平塚駅までの15キロ。参加者は41名。朝9時に藤沢駅を出発し、途中で一時的に雨に濡れたらしい。

旅日記は語る。「ひたすら歩く行程のようだ。その中で印象に残った遺跡がある。『旧相模川橋脚』である。53次の橋脚だから江戸時代の橋の名残りかと思いきやそうではない。なんと鎌倉時代の橋の遺跡なのだそうだ。それが関東大震災の揺れで橋脚が地表に現れた。それにはこんな因縁めいた話がある。これは北条政子の妹の夫である稲毛重成が妻を供養するために作らせた橋であった(沼田頼輔氏の考証)。その完成式典には源頼朝も参加したが、彼は帰り道で落馬し、それが原因で亡くなったという。そんな話をガイドから聞いていると、本当に因縁を感じる。」

僕は鎌倉幕府の源氏と北条氏の確執については詳しくない。ただ、頼朝の死後、鎌倉幕府の実権が北条一族に握られていったことを考えると、矢尾板さんが感じたように、何やら因縁めいたものが漂ってくるような気がする。北条氏いまだここにありと、その存在を現代人に思い出せているかのようだ。例えば、現代に橋脚の遺構を露出するほどの源氏と北条の因縁とはどのようなものだったのか？そんなことを考えながら15キロの道のりを歩くのも一興であろう。

旅日記は更に語る。「突然哲学的なことをもち出して恐縮だが、ものごとの考え方に『一元論』と『二元論』というのがある。前者は、すべての人間は最終的に同じで格差のない存在で、一人々々がかかけがえのない存在だという説。後者は、この世のすべては二極からなっている、例えば、男と女、上と下、明るいと暗い、右と左、東と西、早いと遅い、金持ちと貧乏、などなど…。今回は「二元論」をグループの参加者に当てはめてみた。あの人は、この人は、と見ていたら、ちょうど対になるような二人を発見した。いずれも女性である。そんな風に注目されているとは、当のご本人は露知らずである。名前も知らないし、氏素性も知らない。この偶然の出会いで勝手な想像を膨らませて、勝手に楽しんでいるだけなのだが…仮に一人をA子さんとしよう。この女性は70歳前後だろう。歩くとちょっとびっこを引いている。以前途中で脚を痛め、落伍寸前までいったが、今回も参加している。」脚を痛めてもまた歩こうとする熱はどこからくるのか？「その服装もすごい。紫に赤い小さな☆マークの入ったジャンパーに緑のリュックサックを背負い、ショルダーベルトを胸元で黄色いふわふわしたスカーフ(?)で締めている。そのA子さんがやや前屈みでやや足を引きずりながら一生懸命に歩いている。『53次命』というような歩き方だ。人生の中でようやく癒しの場所を見出したのかもしれない。苦労の中に喜びを見出したのかもしれない。」僕はこの女性に少し鬼気迫るものを感じる。読者はどうだろうか？「足をひきずりながら一生懸命に歩いている」その姿が眼に浮かぶ。矢尾板さんはその様子を「53次命」という言葉で表現している。古い表現だが、これこそ我が命の旅という意味だろう。おそらく「苦労の中に喜びを見出した」というのがAさんの心境なのではないか？悲愴感すら感じさせるAさんは矢尾板さんの言う「二元論」の一方の極にある存在なのだ。

「もう一人をB子さんと呼ぼう。丈の長い青の防寒ジャンパーに、グレーの丸いツバの帽子、サングラス。背中にはブランド品と思われる小型の皮製リュックを背負い、イタリア製かと思われる革靴を履いている。歩き方も颯爽として、両手を振りながら自信に満ちている。なんとなく山の手夫人という言葉がピッタリというような人だ。身なりからの想像では、きっと豊かな生活の中でごく当たり前の楽しみとして、53次に参加しているのだろう。」B子さんにとって「53次ウォーク」は確かに日頃の楽しみの一つのようだ。「歩き方も颯爽としている。」健康体で足の痛みもないらしい。矢尾板さんは見た眼の年齢は書いていないが、僕の印象では五十前後といったところである。しかも、生活は豊かで、歩くのが楽しくて仕方ないのだろう。そんなB子さんは矢尾板さんの「二元論」ではAさんの対極にある存在なのだ。41名の参加者の中で、A子さんとB子さんの存在は矢尾板さんの注意を強く引いたようである。それほどこの二人の女性の印象はその違いが際立っていたのだろう。企画ツアーとはいえ、その歩き方で参加者が我知らず自分の人生を物語ってしまうとは、これまでの僕の見聞にはなかったことだ。矢尾板さんは自ら「歩く」ことで、女性に関する稀有な経験をしたにちがいない。

そして旅日記はこう締めくくる。「このA子さんとB子さんを見て、ふつうの人は、B子さんに好感をもつかもしいない。でも、考えてみた。神様はどちらを人間らしいと思うだろうか。今回はこの二人に一言も声をかけなかったし、そのチャンスもなかった。私の印象は想像の域の話で、自分の勝手な思い込みかもしれない。もし次回AさんとBさんが参加して、同じグループで歩くようであれば、声をかけてみようと思う。どんな人なのか…それは次回のお楽しみにしよう。」

16時45分矢尾板さんは平塚駅の近くに無事到着。彼は9時から昼食時間の休息を挟んで16時45分まで歩き続けた。おそらく途中で小休止もあっただろうが、女性のA子さんB子さんもそれぞれの思いを秘めて歩き続けたのだ。先日、矢尾板さんと会う機会があったので、じかに尋ねたところ、最終ゴールは京都の三条大橋だという。月一回の53次歩きだというから、これから神奈川県を抜け

て東西に長い静岡県に入り、京都まで2年以上はかかりそうである。

【電計2016年10月号】

【題名：東海道53次ウォーク（4）】

矢尾板さんの旅日記は語る。「今回は平塚宿から大磯宿を通過し二宮駅までの9.9キロである。平塚宿から大磯宿までは2.9キロしかなく短いからだ。53次では最短距離の宿場であるという。」53次ウォークがほぼ3キロで終わってしまっただけで、しかも確実に味気ない。そこで3倍以上のほぼ10キロを歩くことになったらいい。今回の参加者は35名だという。

旅日記の当日は4月11日。「あいにくの霧雨。これから本格的に降るかもしれない雨対策をして出かける。仮住まいをしている下北沢を出発し、新宿駅から朝一番のロマンスカーで藤沢へ。ここで電車を乗り換えて平塚の集合場所に到着。東横イン前に着いた時にはかなりの雨になっていた。前回特に注意を向けていたあのA子さんとB子さんが参加しているかどうかと探すが、傘と雨合羽が邪魔になって中々見つからない。」

僕でも矢尾板さんと同じ気持ちで探したことだろう。前回矢尾板さんはA子さんについてこう書いた。「やや前屈みで足を引きずりながら一生懸命歩いている。・・・人生の中でようやく癒しの場所を見出したのかもしれない。」一方、B子さんに関しては「歩き方も颯爽としていて、両手を振りながら自信に満ちている。なんとなく山の手夫人という言葉がピッタリというような人だ。」と書かれていた。

旅日記はこう続く。「ダメかなと思ったとき、A子さんを見つけてほっとした。そのすぐあとにB子さんも発見する。出発前のセレモニーの前にA子さんに初めて声をかけた。本人は小田急線の祖師谷大蔵に住んでいる。京都まで何が何でも歩きたいと言う。次にB子さんに声をかける。彼女は都内から来ており、カメラをもって近所を散策するのが楽しみとか。京都まで歩くというお二人の発言を聞いて安心した。これからも出会う可能性は高そうである。初対面できなりの深いところに切り込んではずい。まずはゆっくりと一緒に旅しよう。」

同感である。おそらく二年以上は続くという53次ウォークだ。じっくりと二人のひとと為りを観察するのがいい。その点矢尾板さんは元メガバンクの銀行員だったから万事にソツがなさそうだ。

さて、いよいよ出発。そして、「まもなくお椀型の高麗山が迫ってくる。これは広重の浮世絵にも描かれている。ガイドによると別名ペテン山と呼ばれていた。大磯宿の方が平塚宿より有名で大きな宿場であったため、旅人を平塚宿に泊めるための留女がいたという。あんな大きな山があつては今日中に大磯宿に着かない、だから、平塚宿に泊まりなさいとウソをついたのだ。実際に近づいてみると、目の前に立ちはだかる迫力があつた。ところが、翌日行ってみれば、街道は山の麓にあつて山越えなどしなくてもよいことが分かる。現実の高麗山は標高162メートルでしかない。」

おそらく、江戸時代の高麗山周辺は鬱蒼とした雑木林ばかりで、いかにも山越えという印象を旅人に与えたのではないかと、だから留女のウソにころりと騙されてしまったのではないかと。ちなみに、「膝栗毛」には、弥次さん北さんが平塚宿の留女に騙されたという記述はない。

ガイドの解説によると、この高麗山にはいわれがあつて、「西暦668年に唐と新羅の連合軍に破れた高句麗王族と従者の一部が渡来した折、有力な集団がこの山麓に住みついて開墾に尽力した」ということらしい。

矢尾板さんの旅日記が語る。「そこを過ぎると、虎御前の化粧井戸を通る。彼女は仇討ちで有名な曾我兄弟の十郎の恋人であつた。兄弟亡きあと19歳で尼となり、庵を結んだ跡地に延台寺がある。ここに虎御石が安置されている。その頃には雨が小降りになり。大磯の海の近くでお弁当を開く。」中身は何だったのか、矢尾板さんは何も語っていない。少し気になる。ツアーでしばらく歩いたあとのお弁当はおいしいものだ。僕なら、そのような時、脂がこつてりとつた牛肉弁当が食べたい。きっとまた歩こうという元気が出るにちがいない。「午後の行程に入るとすぐに嶋立庵がある。こ

の地で、あの西行が、心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ、と詠んだという。江戸時代になって、崇雪という人物が西行を忍んだのが始まりで、その後俳諧道場となる。趣のある建物だ。」ここで崇雪という名が出てくる。ネットでその名を調べたが、素性はよく分からない。一方、ここが京都の落柿舎、滋賀の無名庵と並んで日本の三大俳諧道場であることが分かった。僕は京都の嵯峨野を歩く旅で落柿舎を何度か訪れたことがある。しかしそこが俳諧道場になっているとは知らなかった。

更に矢尾板さんは大磯を歩く。そこには、伊藤博文、新島襄、島崎藤村などの邸宅や別荘があるそうだ。中でも圧巻なのは旧吉田茂邸で、駐車場の前に「兜門」というものがあり、これは日本建築の粋を集めた門だという。現代の東海道53次の街道には「膝栗毛」の時代とは違う見所が幾つもある。おそらく往時は海や山といった風景のみが見所だったろう。十辺舎一九が現代の東海道筋を書いたらどんなものになるのか？おそらく、町々の風俗、例えば、キャバクラ、クラブ、デリなども書くかもしれない。それを想像すると少し楽しくなる。いよいよゴールに近くなる。

「六所神社というのがあった。名前からして何かと思ったら、ガイドがこう説明してくれた。昔の相模の国に有力な5つの神社があった。平安時代の国司は着任後順番に回るが、有力神社の確執を避け、参拝の労を省くため一箇所に集めたそうなのだ。神様の合理化とは初めて聞く話であった。

午後3時55分ゴールの二宮駅に到着。その間何気なく観察していたら、A子さんは友人と常に先頭を歩いていた。首にカメラをぶら下げ、名所旧跡では必ず誰よりも早く撮影場所に行きカメラを掲げた。あれだけ撮るのだからパソコン処理にたけているのだろう。一方のB子さんはだいたいグループの真ん中あたりを一人黙々と歩いていた。二人の性格がだんだん見えてきた。」

それにしても、雨の様子を気にしながら名所旧跡を訪ね、「歩き」を楽しむのも中々いいものだ。ただ、電車で毎月一回集合場所に行き、ゴールの駅からまた電車で帰るとするのが現代の「53次ウォーク」なのだ。東京から遠くなればなるほど大変である。実際には参加していない僕でもそれを考えると少し気が重くなる。矢尾板さん、A子さん、B子さんを含めて実際の参加者はどうであろうか。

【電計2016年12月号】

【題名：東海道53次ウォーク（5）】

「天気予報では降水確率30%。朝から曇空です。出発点の二宮駅前にはすでにお仲間が集まっています。A子さんもB子さんもいます。」

そして10分ほど軽い準備体操をして、9時10分に出発。ウォーク・グループは36名である。これまでの出発時間も9時過ぎだった。しばらく歩いてちょうど昼時にランチを食べる場所に着くというスケジュールなのだろう。宿場としては大磯宿から小田原宿までである。

旅日記は語る。「大磯宿と小田原宿の間は16キロと長いので、その間に『あいのしゆく』という立場(休息所)があったそうです。漢字で『愛の宿』かと思いましたが、正しくは『間の宿』だそうだ。」矢尾板さんならずとも、「あいのしゆく」の「あい」に強いアクセントがつけられたら「愛の宿」を思い浮かべるだろう。しかし、この場合は「間の宿」だから、「あいのしゆく」には特別にアクセントがつかないはずである。ひょっとしたら、ガイドは「あい」にアクセントをつけたのかもしれない。旅の余興にそのような墮ジャレがあってもいいだろう。旅日記はそれに触れていないが、参加者はくすくす笑ったかもしれない。僕などはいわゆる「止め女」のいる遊郭を連想してしまったことだろう。

しばらく歩くと、車坂という所にさしかかる。そこに古い看板があり、旅日記はそこに書かれた三つの短歌を紹介している。

「鳴る神の声もしきりに車坂 とどろかしふるゆう立の空 太田道灌
浜辺なる前川瀬を逝く水の 早くも今日の暮れにけるかも 源実朝
浦路行くこころぼそさを浪間より 出でて知らする有明の月 北村禅尼(阿仏尼)」

かつての車坂のあたりは歌を詠む心境になりやすい場所であつたらしい。もっとも、「膝栗毛」の弥次さん北さんはバカ話ばかりして旅をしていたから、このあたりのことは何も語っていない。おそらく現代風の住宅や店舗ばかりになってしまっているのだろう。矢尾板さんもここで特別に歌を詠むような心境にならなかつたようだ。「そうこうしていると、『羽根尾通り大山道道標』に至る。雨降りの神様を祭り、大山講という全国版で信者を増やしていたので、全国から大山詣でが盛んになり、各地に道標が必要だったのだろう。この辺では、昔から、江ノ島、鎌倉が知れ渡っており、昔の人も「大山詣で」と称して観光を楽しんだことが偲ばれる。」僕は大山詣というものを全く知らなかつた。おそらく日照りばかりでは困る農民達が雨乞いの神様として尊崇したのではないか。おそらく矢尾板さんもガイドの説明に温故知新を感じているだろう。

「その後平坦な道を西に向かう。国府津に『井上みかん』という店があつた。この店が東海道線でみかんをネットに入れて売り出したのだそうだ。途中で西湘パーキングという所があり、ここにはいわば裏口入学をした。つまり、コンクリートの細い階段を上り、フェンスの狭い入り口からパーキングに入ったのだ。海の見えるベンチで昼食のお弁当を食べる。幕の内弁当にお茶である。偶然隣に座つたのがA子さん。お互いに無言・・・食事の終わりにAさんは自宅からもってきたという甘夏と井上みかんを半分分けてくれた。ありがたい。」

矢尾板さんとAさんの静かな交流が始まつたようだ。「やや前屈みで足を引きずりながら一生懸命に歩いていた」Aさんが「甘夏と井上みかんを半分分けてくれた。ありがたい。」とは矢尾板さんの率直な気持ちであろう。ちなみに僕は井上みかんというものも知らない。一度食べてみたいものである。そして、午後の出発時、次回の参加申し込み書が回されてきた。あのBさんもたまたま近くにいたので、自分の名をすらすらと書いているのが見えたという。矢尾板さんはそれをこう表現している。「立派な名前でした。勝手な意識をすると、幸福の極みである王家出身だが、この世では適度な節度をもって生きる子供になった、というような意味のようだ。王家の名、つまり、皇族の血筋というと、近衛とか鷹司とかの苗字が頭に浮かぶ。名は節子か。矢尾板さんがずばりと本名を言わない以上、僕もこれ以上の詮索はやめておこう。さあ、矢尾板さんとA子さん、Bさんとの間からどのような交流が始まるのか？「更にしばらく歩くと、二宮金次郎の石像がある。・・・そこから酒匂(さかわ)川にさしかかる。安藤広重は小田原といえば、この酒匂(さかわ)川を描いた。小田原の城は遠くに霞んでいる。この川には橋がなかつた。・・・ここは西国に対する江戸の防衛拠点だったそうだ。・・・当時の旅人は徒歩渡かちわたりといって人足に手伝ってもらって渡つた。何人手伝うか、また、水量によって値段が違つたようだ。一番安いのはただ引張るだけのタイプだったようだ。大雨になると、川止めになり、何日も宿場に足止めされて宿泊代が嵩んで大変だったようだ。また、400人程度の家来を連れてくる大名行列が最優先なので、一般の旅人が川を渡るのは大変だったようだ。」

僕達はそのような歴史の裏面にあるものを意外に知らない。矢尾板さんでも東海道53次ウォークに参加したことで、その裏面にあるものの片鱗に少し触れているのではないか？

さて、旅日記も終わりに近づいてきた。「もう小田原の市街地である。小田原宿は、本陣4軒、脇本陣4軒、旅籠約90軒と、街道一の宿場だったそうだ。各大名が宿泊し、それによって小田原の物産が全国に紹介されるようになった。例えば、小田原提灯、小田原蒲鉾、小田原梅干し、いろいろなど・・・やはり観光は大事なことなんだと改めて思う。

さて、旅日記がいよいよ最後の下りになる。「解散は小田原城。15時25分。歩数にして21,541歩であつた。おかげさまで天気は最後までもつた。今夜はマッサージが楽しみだ。」

矢尾板さんも東海道53次ウォークのあとのマッサージが楽しみになってきたようだ。しかも、今回初めて彼が万歩計を携帯していることが分かつた。21,541歩とはかなりのものである。ランチ休憩や小休止の時間を除いても、1時間にはほぼ4千歩になる。マッサージが楽しみになるのも頷ける。

今回は二宮駅前から小田原城まで16キロというかなりの長距離であつた。歩くだけでも大変だったろう。53次ウォークはこれから神奈川県を出て東西に長い静岡県に入る。タフな道のりである。グ

ループの中から一人の脱落者も出ないことを僕は願っている。

【電計2017年2月号】

【題名：東海道53次ウォーク（6）】

今回は箱根山を途中まで走破する行程だ。このあたりになると、小田原駅前集合ではなく、参加者は東京駅あるいは横浜駅からバスで前回のゴールであった小田原城まで運ばれるという。

矢尾板さんの旅日記が語る。「7時20分に東京駅に近い丸ビル前でバスに乗った。途中海老名PAで休憩。今回はA子さん、Bさんが同じグループにいないようで、旅の味が消えたかと少しがっかり。バスは指定席で、私は最後尾にある中高年のおじさんグループに分類された。ガイドは京都出身の連(つら)さんという珍しい名の男性である。添乗員は篠澤智子さん。・・・もう少し先に進むと、宿泊つきになる。京都に近づくと、二泊三日の旅になる。・・・9時5分に前回の終着点である小田原城箱根門に到着した。・・・ああ、ここでBさんを発見する。しかし、Aさんの姿がない。彼女は今回不参加か別のグループに入っているのかもしれない。」

今回のウォークでは矢尾板さんのグループにAさんがいない。僕も少し残念な気持ちである。しかし、Bさんがいる！僕も矢尾板さんと同じ安堵の気持ちを共有した。

一方、東海道53次も東京から遠くなると、宿泊がつくという。やはり参加者の負担が時間的にも経済的にも少しずつ重くなっていくようだ。このような企画ツアーに参加するには、先ずよほど時間に余裕のある者でないと無理だろう。その点で、矢尾板さんは大学院で神学を学びながら週末にこのツアーに参加している。忙しい身のはずだが、それも「温故知新」を求める気力のなせることかもしれない。

旅日記は続く。「小田原城箱根門で横浜グループのバスを待つ。渋滞のためか遅れている。結局時間の無駄と自称第一班は9時50分に出発。ゴールは箱根の畑宿。江戸から行くと、湯本の手前にある宿場である。・・・途中、小田原名物のあんぱんに心惹かれる。ガイドからこの店でそれが買えると聞かされると、みんな今しかないとあんぱんを買い漁る。私もその一人である。ちなみにあんぱんにもあれほど多くの種類があるとは知らなかった。平坦な道を2、3キロ歩くと、昼食予定の場所に着く。ところが、まだ弁当が届いていない。そこで蒲鉾の鈴廣本店で予想外の1時間、自由解散となる。ここで見つけたのが『お試しセット』。高級蒲鉾3品と箱根生ビールが一杯ついて500円だという。高級蒲鉾とビールの喉越しが実にいい。そこでこのしゃれたカウンターで時間を潰した。」

あんぱんの味覚を評しなかった矢尾板さんは蒲鉾とビールの味覚がよほど気に入ったようだ。これも旅の途中の楽しみと言うべきだろう。おそらくそういう店でしか味わえない味覚なのだ。

「予定より大幅に遅れた幕の内弁当の昼食で腹ごしらえをして、集合場所に行く途中でBさんと一緒になる。少々会話を交わす。『首にカメラをぶら下げて、常にこれぞというポイントでシャッターを切りますね。そんなに写真を撮ってアルバムでも作るんですか？』と質問した。『孫の写真はちゃんと編集してコメントも入れてるんです。嫁に喜ばれていますよ。ですが、五三次は今のところ各回のホルダーの中にデータが眠っているだけで・・・』とのこと。」

その会話でBさんの日常的私生活の様子が少し分かった。彼女は写真好きなのだ。そして孫好きなおばあちゃんである。お嫁さんともうまくいっているようだ。それにしても、53次ウォークに毎回参加するとは元気なおばあちゃんである。「両手を振る歩き方が颯爽としていて、なんとなく山の手夫人という言葉がぴったり」のBさんはその実像の片鱗をちらりと見せてくれた。

「そして、12時50分、いよいよ箱根の山道に挑戦する。箱根は天下の剣と言われる。箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川という箱根八里は、小田原から三島までの八里、約32キロをいう。その八里の真ん中に天下の剣・箱根山1436メートルがそびえ立つのである。今は火山活動が盛んでおそれられている。観光客はみなさん敬遠しているようだ。実際の交通標識にも大涌谷通行

禁止の表示が出ていた。(筆者注:この原稿は昨年6月の時点で書かれている)。それでも我々は京へ行く者ばかりだから敢えて行く。」

当然だが平坦な道の何倍かの負荷がかかる。途中ガイドが色々説明してくれるが、そちらに神経が行かない。ひたすら上ることとタオルで顔を拭くことしか関心がない。今日のゴールまで3箇所
の石畳の道が残っている。実際に歩くと、現代の舗装道路とは雲泥の差がある。実に歩きにくい。ごつごつして、靴の裏をどこに着地させるか、下を注意深く探しながら歩かねばならない。

石畳の道に入ると、獣道に敷き石があるように感じる。幅は1~1.5メートル程しかない。鬱蒼とした山中の道である。途中急坂もあり、某女性の足が痙攣してしまい、全体の進軍が止まることも何度かあった。大汗をかきながら、16時45分にゴールの畑宿に到着する。万歩計は23722歩。歩いた証拠のシールを手帳に張る。実は畑宿は53次の正式の宿場ではないのでスタンプが捺されない。整理体操をし、バスで17時15分下山。幸い渋滞に巻き込まれず、18時45分に東京駅に到着した。そのおかげで、東京発19時16分発のつばさで米沢に戻ることが出来た。大汗をかいた運動後の爽快感からか、新幹線のシートから微妙に感じる定期的な振動が心地よい。

今回のウォークから一首献上。水無月に 歩いて登る 箱根山 人生初の 京への歩み」

矢尾板さんがウォークで初めて詠んだ歌だ。素直な表現で中々いい。新幹線に乗れば、東京から京都まで大した時間はかからないが、敢えて企画された道を歩いて行くのも人生の一興である。その一興が彼のこれからの人生にどんな影響を与えるのだろうか？

ただ今回のウォークにA子さんの姿がなかったのは少し寂しい。それでも「山の手夫人」のB子さんの私生活の片鱗が垣間見えた。次回はA子さんの様子も知りたいものである。もっともそれは矢尾板さんでもどうにもならない。今回は彼が詠んだ歌の一首を高く評価して締めくくりたい。「水無月に 歩いて登る 箱根山 人生初の 京への歩み」。

【電計2017年3月号】

【題名: 東海道53次ウォーク (7)】

矢尾板さんの旅日記によると、今回は東京駅前の丸ビル前に集合、午前7時20分にバスで出発。グループの総勢は28名だ。そのバスで前回のゴールであった畑宿まで行く。畑宿の寄木会館に着いたのが9時40分だというから、ウォークの前にほぼ2時間半ほどバスの旅があった。今回のゴールは箱根峠である。ウォークの出発点が東京から遠くなるほど、参加者はそれだけ長い時間をバスに乗ることになるわけである。中々きつい企画だが、それでも28名が参加したとは頼もしい限りだ。

さて旅日記は畑宿からのウォークの様子を語る。「天候は晴れ。出発点の寄木会館から少し歩くと、江戸から23番目の一里塚が当時の姿のまま残っている。ここから急坂になる。箱根一番の難所だという。西海子(さいかち)坂、^{かき}櫃の木坂という名の由来を記した立札があった。櫃の木坂の立札にこんなことが書かれている。『櫃の木のさかをこゆればくるしくて、どんぐりほどの、涙こぼる。』私の場合には涙ではなく汗であった。次が猿滑坂。ここにも立札。『殊に危険、猿といえどもたやすく登り得ず。』このあたりには東海道きっての急坂が続き、世にいう雲助たちの活躍の場だったそうだ。雲助という^{おいはぎ}追剥を想起するが、そうではなく、言葉の意味は逆だったらしい。いわゆる雲助と呼ばれる人達は小田原の間屋場で働く人足のことだったそうで、間屋場では人足を登録制にして仕事を割り当てていた。だから旅人に悪さをした者は殆どいなかったという。」

雲助のことは矢尾板さんの旅日記で僕も認識を改めた。僕も「雲助」というと旅人を苦しめる追剥だと思込んでいた。一般的に何故そういうイメージをもたれてしまったのかは定かでない。僕の場合は幼い頃よく見た東映の時代劇の影響があったような気がする。「雲助」は今でいうチンピラに似た悪者として描かれる場面が少なくなかったように思う。一方、矢尾板さんは「雲助」の実際の姿についてこう語る。「雲助になるには次の三つをパスしなければならなかった。1.力が非常に強いこと

2.荷造りが優れていること(荷物を見ると、誰が造ったものか分かり、また、箱根で一度荷造りした荷物は、京都まで決して崩れなかったそうだ)。3.そして、もう一つ、歌を唄うのが上手でないと、一流の雲助とは呼ばれなかった。」実は、それはガイドの説明で、矢尾板さんは全く知らなかったという。僕も同じである。特に3番目はユニークだ。おそらく何かの流行歌を歌って旅人を楽しませたのではないか？ガイドは実によく知られざる裏の歴史をよく調べている。脱帽である。

旅日記は更に続く。「急な階段を登り、追い込み坂を上ると、甘酒茶屋があった。旅人は急坂を登ってきたのだから、誰もが息切れ状態だ。この茶屋は往時も今も絶対に必要な休息所だといっていいだろう。ありがたいことに、ここで茶碗一杯の冷たい甘酒を提供してくれた。それが無料というのが実にいい。我々のグループがそこで一休みしていると、遅れていた横浜発のグループが入ってきた。彼等は、幅が1メートルもない狭い道を一列縦隊で歩いてきたから、全員の顔を見ることが出来た。自然とあのA子さんを探したが、彼女の顔はない。今回だけお休みなのか、それとも、前回足が痛そうだったのでウォークをあきらめたのか。仲間が一人欠けたようで感傷的な気持ちになった。

もう少し、もう少しと、ガイドに騙されながら更に坂を登る。白水坂、更に、道端に巨大な石がある天ヶ石坂を登りきると下り坂になる。坂を下っていくと、ようやく芦ノ湖が見えてきた。」

ああ、あのA子さんがいない！今回は「やや前屈みで足を引きずりながら一生懸命に歩いていた」彼女の姿がないのだ。A子さんは矢尾板さんに「何が何でも京都まで歩きたい」と語っていたのだが、ウォークをあきらめたのかもしれない。足の痛みがひどくなったのだろうか？

そして旅日記はほっと一息ついたようにこう語る。「湖畔の恩賜箱根公園に着く。13時15分。太陽が燦燦と降り注ぐ緑の公園である。ここでお昼のお弁当が配られる。ベンチに座り弁当を開く。普段の東海道歩きの何倍かのエネルギーをすでに消費している。実際の味よりもおいしく感じたのは私だけではないように思う。昼食休憩は35分ほどで終わって出発。すぐ隣がいわゆる箱根関所である。昔の姿が復元されている。」

送ってもらった写真を見ると、復元された関所は立派なものだ。ネット情報によると、関所は小田原藩が管理運営していたという。小田原藩は譜代大名なので、幕府も安心して管理を任せただろう。往時のことは矢尾板さんも旅日記に書いている。

「関東を守る要の関所であるだけに、入り鉄砲と出女などの厳重な取り締まりがあったという。箱根の関では特に出女の詮議が厳しかった。箱根の山々を眺めていると、広い山路のどこかを通して抜けられそうに思えるが、江戸時代には関所周辺の山はすべて御要害として立ち入り禁止、木々伐採禁止になっていた。例えば、元禄15年(1702)、伊豆大瀬村の農家の娘・お玉が関所破りで獄門にかけられた。奉公先から故郷に帰ろうとしたが、通行手形がないために、夜陰にまぎれて山越えしようとしたところを捕まったといわれている。関所破りは非常な重罪であった。このような話が知れ渡り、当時の通行人は恐れながら通っていたことだろう。」

今回の旅日記もいよいよ最後だ。「芦ノ湖を後にして、再び細い山道に入る。ガイドの、もうすぐもうすぐも、効かなくなる。ひたすら前に進むのみ。今日のガイドは全員が急坂を登りきると^{あめ}飴をくれた。その飴が恵みの雨となった感じである(笑)。みんな自然と受け取って舐めてしまう。そしてついに箱根峠に着いた。ゴールは峠からちょっと下った箱根エコパーキング。15時50分であった。ちなみに気温は21度。歩数は18900歩。途中のパーキングで買った黒豚肉マンがおいしかった。箱根エコパーキングから東京駅に向かうバスの中では爽快な疲労感を感じていた。ところで、箱根山を歩きつさは各地点の標高で分かる。前回ゴールの畑宿が400m、甘酒茶屋700m、天ヶ石坂820m、芦ノ湖面723m、狭石坂758m、箱根峠846m。アップダウンの多いきつい行程であった。」

矢尾板さんは箱根峠まで踏破した。グループの人達もよく頑張ったものだ。しかし、今回A子さんが姿を見せなかったのは残念である。B子さんはどうであったか？仮に彼女が参加していても、今回ばかりは矢尾板さんもB子さんと話す気持ちの余裕がなかったのだろう。

【電計2017年6月号】

【題名：東海道53次ウォーク(8)】

今回の矢尾板さんの旅日記は語る。「9月5日、7時20分に東京駅丸ビル前をバスで出発。ガイドはつとさん、添乗員は篠澤さん。東京組は23名、横浜組を加えると、60名強の人達が参加した。10時10分に前回のゴール地点である箱根エコパーキングを出発。今回は峠から下るだけなので、楽勝と思いきや全く逆であった。上りよりも下りの方が大変なのである。江戸時代の人足の労賃も、下りの方が25パーセント程度高かったのだそうだ。」これを読んで僕は自分にもそんな経験があることを思い出した。随分前のことで、どこの峠であったかは覚えていないが、急坂を下る時膝ががくがくになってしまったことがある。だから歩くというより走って下ってしまったのだ。ただ、「江戸時代の人足の労賃も下りの方が25パーセント程度高かった」とは初耳である。

「旅日記」は続く。「そういえば、いつも先頭を歩いていたB子さんが何故か最後尾を歩いている。道は木漏れ日の射す箱根竹のトンネルの下り道だ。確かに下りはきついし、足の爪を痛めるようである。途中でB子さんに訊いてみた。『いつも先頭を歩いていたのに、今日はどうしたんですか？』『ああ、下りには弱いんです』なるほどそうなんだと思った。ところで今回もA子さんの姿が見当たらない。」

A子さんは脱落したらしい。ゴールの京都まで歩き通せる人は最初の参加メンバーの何%になるのだろうか？20%か30%か？そのあたりのことは最後の頃になって矢尾板さんの「旅日記」に書かれるだろう。それにしても、B子さんは頑張り屋のようだ。何となく山の手夫人といった感があるというのが、彼女に対する矢尾板さんの印象だが、僕としてはもっと彼女のことが知りたいと思っている。平凡な人生を歩んでいるのかもしれないし、波乱万丈であるかもしれない。たとえ平凡でも、京都のゴールまで歩き通したら、彼女の心に何か期するものがあるのだろう。

再び旅日記に移る。「そうこうしていると、『兜石』という場所に来た。豊臣秀吉が小田原城を攻める時、あまりに急な坂なので、兜をこの石の上に置いたところから、そう名づけられたのだそうだ。更に下ると、『雲助徳利の墓』というのがあった。雲助の頭役をしていた松谷久四郎の墓といわれ、終生酒を愛したことから、この墓には全面に徳利と杯が浮き彫りされている。珍しい墓だ。

そして「中山城跡」に到着。「中山城」は日本百名城の一つで、北条氏が築城した。基盤型に掘った「障子堀」や、土塁が連なる「畝堀」が遺構として残っている。しかし、秀吉の大軍に攻められて半日で落城したという。ここまでの約4キロの行程であった。ここでお昼の弁当を開く。空腹だったのでご当地名物『しらす』のちらし寿司がうまかった。」このウォーク企画ではガイドが実に色々なことを説明してくれる。市販の書籍には載っていないことばかりで、これも参加者にはいい歴史の勉強になるといいだろう。しかも、ご当地の「うまいもの」を提供してくれるのがいい。

旅日記は続く。ここではすでに脱落したらしいあのA子さんのことが少し語られる。「食事休憩のあと、13時10分から午後の部に入る。富士見平に芭蕉の句碑「霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き」がある。その句の通り、今日は雲がかかっている富士山は見えなかった。芭蕉は見えないということを楽しむのだからすごい。だらだらした下り坂。気がつくと、私は最後尾を歩いていた。このチームのルールとして、先頭をガイドが、最後尾を添乗員が歩くことになっている。従って私は添乗員の篠澤さんと肩を並べて歩くことになった。谷側では『日本一の吊橋工事』をしている。写真を撮ってもらったりして会話が進んだ時、思い切ってA子さんのことを訊いてみた。『小田急線沿線に住んでいて、足を引きずって歩いていた女性が見えませんか？』篠澤さんは最初ピンとこなかったようだが、少し経ってA子さんのことを思い出してくれた。『ああ、よくスプレーの筋肉痛の薬を噴霧していた人です。』その時の彼の口ぶりでは、A子さんはその他大勢の落伍者の一人と認識されていたようである。実際に当初200名だった参加者が今は60名ほどに減っている。私の中では、二人の名役者がいたのに、そのうち一方の役者が退場したままではおもしろくない。よほど住所と名前を聞き出そ

うと思ったが・・・個人情報の管理が厳しい時代だし、ストーカーと思われるかもしれないし・・・そんなことを考えていたら、笹原一里塚(27番目)に到着する。当初200名だった参加者が今は60名ほどに減っている。」と語っている。箱根の山を下る所で参加者は30%に激減してしまった。」

彼は命を削っても歩こうとするA子さんの姿に鬼気迫るものを感じていた。一方、B子さんは、その対極にあるような女性で、ブランド物らしいリュックを背負い、颯爽と歩くその姿は彼に山の手夫人といった印象を与えた。ところが、A子さんの方が姿を見せなくなってしまっただけはおもしろくないのもよく分かる。

旅日記はいよいよゴールに近くなる。「ガイドさんが今日のメインイベントの場所に来たと言う。そこは奈落の底への下り坂で、『こわめし坂』といわれている。坂があまりに長く、しかも急なので、馬の汗と熱で背負った米がこわめしになったからだという。長い坂を下ると、靴の中で足が泳ぐような状態になり、指先が靴に当たって痛い。上るのも大変だが下るのも大変だ。そして松雲寺で小休止。その時ガイドが富士の頭が見えると叫んだ。雲の中に霞んで山頂が微かに見えた。少しは見えたのだから、芭蕉よりは幸せかなと思う。そしてまた下り坂。今日のゴールである『伊豆フルーツパーク』に到着したのは15時40分であった。歩数は21077歩、距離にして10.4キロである。」

箱根の下り坂を歩くのは上り坂を歩くよりきついとは、実際に行ってみなければ分からないことだ。今回矢尾板さんはそれを実体験した。ちなみに「東海道中膝栗毛」には箱根下りの描写はない。

そして、「伊豆フルーツパーク」で、彼は疲れた体に沁み込むようなメロンジュースを飲み、ミックスソフトクリームを食べた。矢尾板さんの今回の旅日記は、これまでのものと比べても、格段に箱根下りのきつさの実感に溢れている。次回がどんなウォークになるのか大いに楽しみである。

【電計2017年7月号】

【題名：東海道53次ウォーク(9)】

今回は矢尾板さんが朝寝坊をして焦りまくったエピソードから始めよう。「世田谷・下北沢にある娘の家ではっと気づいたのが6時19分。バスは東京駅・丸の内の丸ビル前から7時に出発する。今回は絶対に間に合わない。一瞬欠席の思いがよぎる。位置関係から考えて通常1時間は必要とする。しかし、斎藤さんのコラムに穴はあけられない。

とにかく体が自然に動き出し、用意してあったリュックを抱えて飛び出す。下北沢駅に走る、走る、走る。駅に着いても、ホームは深い地下にあるのでまどろっこしい。6時33分発の上り電車に乗る。間に合わないのは分かっていたので、添乗員の篠澤さんに電話した。今電車の中ですが、少し遅れますと言うと、大丈夫ですよという一言が返ってきてほっとする。

代々木上原で千代田線に乗り換え二重橋前をめざす。みんなを待たせていると思うと、電車が実にゆっくりと一駅一駅を通過する。7時2分に二重橋前に到着。そこからまた人影のないガランとした地下の御幸通りを丸ビル方向へ走った。目星をつけて地上に出ると、篠澤さんが立って待っていてくれた。よかった、間に合った！バスに乗り込み、待たせてすみませんと、旅仲間に言いながら、一番奥の席に座った。」

ああ、よかった！僕も彼のそのエピソードを読みながら、ほっと胸を撫でおろした。最終ゴールまで歩き通すのに2年半くらいはかかるというのだから、こういうことがあってもおかしくはない。それでもよく間に合ってくれたものだ！そして、僕は「斎藤さんのコラムに穴はあけられない」という矢尾板さんの心意気に感謝した。バスが出発したのは7時10分。ウォークリーダーは小林さんという女性だ。そして、9時15分に前回のゴールであった伊豆フルーツパークに到着したという。

矢尾板さんの「旅日記」が続く。「トイレに行き、準備体操をして9時半にウォークスタート。ゴールは沼津城本丸跡。お天気にも恵まれ、歩くには最高の日だ。今日は滑り込みセーフだから余計に嬉しい。少し歩くと、右手に富士山の頭が見えてくる。今日は一日富士山に見守られて歩くことにな

る・・・平坦な道を歩き、初音ヶ原を横切る。ここで源頼朝が鶯の初音を聞いたことからその名があるそうだ。石畳の遊歩道を歩き、錦田一里塚(江戸から28番目)を通過する。

すると、大根の碑があった。平井源太郎という人物が農業を重んじたことを記念した碑で、ガイドの話では、この人物が有名なノーエ節の作者なのだそうだ。」

ノーエ節は僕も聴いたことがある。ただ、最近では聴いたことがないので、歌詞はすっかり忘れていた。情けないことに覚えているのは「ノーエ」だけだ。しかも、その由来も作者も知らず、どこの民謡であるかも知らなかった。今回は矢尾板さんがそのあたりのことをガイドの話として書いてくれた。

『富士の白雪ノーエ・・・三島女郎衆はノーエ・・・』、富士の清らかな水で化粧するため、三島はきれいどころが多いと有名であった。江戸時代のいつ頃からか、富士の白雪朝日で溶けて流れて三島へ落ちて 三島女郎衆の化粧水、といった俗謡が歌われており、これが後にノーエ節に取り入れられたらしい。ノーエ節は農兵節の漢字を当ててるが、三島は幕末に組織された農兵隊の調練場が初めて作られた場所で、この歌は農兵達の行進曲に使われて広まったとされている。

ところが、『野毛の山からノーエ・・・鉄砲かっいでノーエ・・・』という横浜の野毛節も同じメロディだから、どちらかが替え歌ということになる。横浜に外人兵が現れたのも、三島で農兵調練が行われたのは同じ頃だという。ガイドによると、以前のツアーではみんなでノーエ節を歌いながら歩いたとのこと。それだけ耳に残る歌なのかもしれない。」

そして柿田川公園の駐車場で彼にとって大いに嬉しいことがあった。すでに姿がなくなっていたあのA子さんに再会したのだ。矢尾板さんはそれをこう表現している。「午後の集合場所に集まろうとしたら、横浜グループと一緒にになり、その中にA子さんを見つけた。すぐに挨拶し、『箱根の時はいませんでしたね?』と尋ねてみた。『3ヶ月間足が痛くて休んだのです』という答えがすぐに返ってきた。それだけの会話だったが、私は嬉しくなり、思わずA子さんの写真を撮ってしまった。」

矢尾板さんの旅日記は更に続く。「午後の部だ。八幡神社があり、そこから更に川廊下通りを歩き、15時30分、今回のゴールである沼津城本丸跡の中央公園に到着。歩数は21625歩であった。帰路、海老名SAで食べた黒豚肉まんは、空きっ腹だったので実にうまかった。」それから彼はいつものようにバスで再び丸ビル前に戻っていく。今回は箱根下りのようにきつい ウォークではなかったようである。それにしてもこのウォーク企画はうまく出来ていて、ほぼ15時から16時の間にはゴールに着くように設計されている。一方、ガイドもよく昔のことを勉強していて、参加者を飽きさせないようだ。それに格安グルメも中々いい。それでも脱落する者が決して少なくないのはやはりウォークがきついからだろう。あのA子さんも「3ヶ月間足が痛くて休んだ」という。それでもまた参加してくるのは、何かをやり遂げたいという一念に駆られてのことかもしれない。そんな中で矢尾板さんは実によく頑張っている。そして、ガイドの語ることを速記でもしているらしく、色々な場所の逸話をよく書いてくれる。それも彼にとっては旅の一興なのだろう。今でも旅に出れば、置き引きなどという泥棒行為に遭うことがある。泥棒はいつの時代にもどこにでもいるものだ。これまでは53次ウォークの参加者がそのような目に遭ったことはないようだ。しかし、まだまだ先は長い。ひょっとした隙に何かを盗まれるということがあるかもしれない。特に一日のうちで何回も取り出す財布は要注意だろう。今回は矢尾板さんがこれから先そのような目に遭わないように願って筆を置こう。そして、A子さんとB子さんに関わる次回からの彼の二元論が大いに楽しみである。

【電計2017年8月号】

【題名：東海道53次ウォーク(10)】

「事前の情報では、今回のコースは単調な一本道で、途中には何もないということであった。5時に起床し、6時半には東京組のいつもの集合場所である丸ビル前にいた。今回は何事もなく楽勝かと思いきや・・・普段は30分前には到着している女性添乗員の篠澤さんがいない。ガイドの連さん

がツアー企画会社に連絡したりして困っていた。篠澤さんの携帯もつながらない。結局、出発予定時刻の7時になっても、彼女に連絡がつかない状態だった。企画会社は添乗員のいない状態ではダメだと出発許可を出さない。参加者はバスの中で待機している。篠澤さんは事故に遭って怪我でもしたのではないかとみんな心配していた。

そして、7時20分過ぎになって、ようやく横浜組添乗員の永森さんと連さんの連絡がついた。永森さんの情報では、篠澤さんは寝坊してしまった、そこで、彼女は新幹線に乗って沼津で合流すると連さんが話してくれた。そして、東京組の添乗員不在問題は、東京組が海老名SAで横浜組のバスを待ち、とりあえず永森さんに乗り込んでもらうことで解決した。東京組のバスは7時25分によりやく出発。

旅行業法のことは知らなかったが、ガイドの連さんによるとこうである。ガイドはあくまで派遣会社からの派遣社員なのだ。従って、客の個人情報を持している旅行会社の付き添い、つまり、添乗員が必要なのだという。要するに、ちゃんとした役割分担があるのだ。」

以上が今回の矢尾板さんの旅日記の始まりである。ガイドがいても、企画ツアー会社の添乗員がいないと、旅行業法によってバスが出発出来ないとは僕も初めて知った。しかも、それは添乗員の篠澤さんが寝坊したためであったとは！前は、参加者である矢尾板さんが寝坊したが、出発時刻に少し遅れただけであった。一方、今回は、添乗員が寝坊して東京組の参加者全員に迷惑をかけてしまった。バスの出発は前回と同じで7時だったのだろう。それでも、ツアー企画会社と現場の臨機応変の措置があつて、25分遅れで出発出来たのだ。まあ、よかった！旅日記を読む僕もほっと胸を撫で下ろした。

旅日記は続く。「海老名SAで横浜組のバスを40分ほど待つ。横浜組のバスが着き、永森さんが私達のバスに乗ってきた。永森さんは、しきりに頭をペコペコ下げて、明日は我が身だと、自分の失敗談を語ってくれた。バスが出発。そして前回のゴールであった沼津城本丸跡に着く。ここで横浜組のA子さんを発見。B子さんは東京組だから丸ビル前で見つけていた。そこへ篠澤さんがはあはあ息を切らしながら走ってくる。三島まで新幹線の「こだま」に乗り、そこから在来線で沼津まで来たのだそうだ。彼女はみんなにひやかされて照れていた。

そんな状態の彼女がわざわざ私に近づいてきてささやく。前週、プライベートで米沢を訪れ、娘さんと二人で小野川温泉に行った。そして、驚いたことに、上杉神社近辺で偶然私を見かけた。手を振ったが、気づいてもらえなかったという。

さあ、準備体操をして10時40分にいよいよウォークがスタート。」

今回は添乗員の寝坊でちょっとしたドラマがあつた。しかし、さすがは旅のプロである添乗員だけあつて、どうすればバスに追いつくかが分かっている。これまでの経験から、沼津駅と沼津城本丸跡の距離も頭に入っていたのだろう。走れば間に合うから息を切らせて走ったのかもしれない。あるいはそうしないと格好がつかなかったのかもしれない。そうでなくても篠澤さんという女性添乗員の態度には好感もてる。そして、あのA子さんもB子さんも、矢尾板さんと一緒に歩くことになった。

「しばらく歩くと、『乗運寺』という寺に到着。寺の門を入ると、松の大木が迎えてくれた。横枝が伸びていて10メートル以上はあると思われる。もちろん添え木で支えられているのだが。そして、このお寺は有名な千本松原と縁があるという。この寺の僧^{そう}譽^{しょう}上人^{じんにん}が海岸線にあつた松原が戦乱で消滅してしまったことを嘆き復元しようとした。ところが砂地なので松が中々根付かない。そこで、『南無阿弥陀仏』と念仏を唱えながら、一千本の松を一本々々心を込めて手植えた。そこから千本松原といわれるようになったらしい。この寺にはそんな上人のお墓がある。更にもう一つ、あの若山牧水の墓もこの寺にある。『幾山河越えさりゆかば寂しさの果てなむ国ぞけふも旅ゆく』という歌は彼の代表作だ。牧水も千本松原をこよなく愛したそうである。

街道からは外れるが、ガイドの好意で私達は千本松原に足を伸ばすことが出来た。長い海岸線が湾曲しているので遠くまで見渡せる。一千本が今では三十三万本になっているようだ。」

ちなみに、「東海道中膝栗毛」の弥次さん北さんもここを訪れ、北さんがちょっと洒落た歌を作っている。しかし、その洒落とひねりを説明するとスペースをくうので、ここではそう述べるにとどめておこう。一方、かつて一千本であった松が、今では三十三万本になっているとは驚きだ。僕はまだ訪れたことはないが、いつか是非とも行ってみたい場所の一つである。

「お昼は、途中のコンビニの駐車場を借り、バスの中でお弁当を食べる。午後になって『原宿』を通過。ここは東海道53次の中でも本陣が一つしかなく一番小さな宿場だという。そのためかここはのどかで静かだ。次に訪ねたのが『松蔭寺』。この寺は江戸時代の名僧・白隠禅師が住職であった。彼の生まれは私達が通過したばかりの原宿。そのため、この寺は名利となり、500年に一度出現するような高僧に会いたいと、参勤交代途中の諸大名がしばしば立ち寄ったそうだ。ある時、岡山藩主の池田継政が立ち寄った際、備前焼きのすり鉢を贈った。すると、白隠はそれを台風で折れた松の枝にのせてやった。雨よけのためだという。その後その松はすり鉢をのせたまま大きくなった。現在この松は10メートル以上の大木になっているが、その頂上あたりにすり鉢が見える。ただし、これは数年前に取り替えたもので、本物は別に保管されている。何百年の間よくすり鉢が落ちなかったものだが、鉢を交換する時松ヤニで貼りついてたのが分かったそうだ。」

53次ウォークとはいえ、途中でガイドが実に色々なことを教えてくれる。これまで矢尾板さんが旅日記の中で語ったことを僕は全く知らなかった。僧譽上人そうよしょうにんといい、白隠といい、その名の裏には実にユニークなエピソードが隠されているものである。特に長年すり鉢を支えていたのが松ヤニであったというのはおもしろい。もっとも、それを承知の上で、白隠が折れた松の枝の上にすり鉢をのせたとは思えないが・・・しかし、知恵ある高僧なら、それを知った上でのことだったかもしれない。

「これは後日談であるが、明治17年、天皇は白隠に『正宗国師』という称号を贈った。その使者が山岡鉄舟であった。接待で出された酒がうまいと、彼は白隠正宗と名づけたといわれる。私もお土産に一本買う。16時50分ゴールの六王神社に到着する。午前中は空が厚い雲に覆われていたが、午後からは薄日が射し、時折富士も眺めることが出来た。『駿河に過ぎたるものが二つあり、富士のお山と原の白隠』といわれてきたが、その過ぎたるものを二つとも見聞することが出来た。東京組25名。13キロ、24414歩のウォークであった。」

今回は、A子さん、Bさんとの触れ合いの記述がなかったが、彼女達も元気に歩き通したのだろう。それにしても、25名の東京組はよく頑張るものだ。横浜組も似たようなものなのだろう。みんな何か胸の奥に期するものがあるのかもしれない。そうでなければこのきついウォークを歩き通せるものではない。

それに、この企画ツアーは長丁場だから、色々な出来事がある。添乗員の寝坊があってもおかしくはない。そのうちガイドの寝坊もあるかもしれない。そのような時にツアーをどう実行するかが旅行会社スタッフの腕の見せどころだろう。特に添乗員は旅行業法に定められた存在だから責任重大だ。彼等がいなければ、バスが出発出来ないのである。下手をすると、ツアーそのものがキャンセルになってしまう。せっかく指定の場所に集まった参加者にも大きな迷惑をかけるのだ。

さて、今回矢尾板さん達が訪れた「原宿」は、一般には知られていない宿場である。おそらく今訪れても、往時の面影は全くないにちがいない。しかし、矢尾板さんがLineで送ってくれた写真を見ると、街の中から富士の雄姿がよく見える。晴れた日に歩いていた参勤交代の侍達も、おお、富士のお山、などと感動しながら眺めたことだろう。そのような空想もこのウォークツアーの興趣の一つなのではないか。矢尾板さんの旅日記は西国に向けてまだまだ続く。

【電計2017年9月号】

【題名：東海道53次ウォーク(11)】

「今回から初めての泊が入る。したがって2日間歩くことになる。これからどんどん東京から離れ

ていくので、移動時間が増え、現地での正味時間が減ってくる。これからが大変だ。時間もお金も嵩むことになる。」矢尾板さんの旅もきつくなってきたようだ。「12月12日緊張のためか早めに家を出る。7時30分、東京組の20名を乗せて大型バスが出発。横浜で23名を拾う。今回は合計で43名の参加だ。」・・・みんな頑張っているなあ・・・それが僕の率直な印象である。もし自分がこのツアーの参加者なら、このあたりから意地で歩くという感じになるだろう。そして、ゴールをめざす意地とそれが出来た時の達成感が心の支えになるのではないかな？

「東京組のガイドは小林裕子さん。ちなみに正式名称はガイドではなく、ウォークリーダーである。添乗員が篠澤智子さん。横浜組は同じく山本さん、そして、永森さん。バスの中のガイドの説明では、今日10キロ、明日14キロ歩くのだそうだ。私の隣の席は自称呑兵衛のMさん。通路を挟んだ隣にはB子さん。お天気は晴れのようだ。10時55分、JRの東田子の浦駅に到着。ここがあこの山部赤人が、田子の浦ゆうちいでで見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける、と詠んだ所だ。準備体操のあと11時にウォークがスタートする。

そこから小一時間も歩くと、修験道の霊場である妙法寺に着く。ここには中国様式の建物があり、独特の雰囲気にもまれていた。更に武運の神・毘沙門天の仏像もあるという。米沢にゆかりのあるあの上杉謙信が毘沙門天を崇拝していたのを思い出す。ここで御朱印状を書いてくれるというので、書いてもらった。それを見ると、『旧吉原宿妙法寺』となっていた。ガイドの説明によると、水害や火災で、ここは三度も場所が変わり、地名も元吉原、中吉原、内吉原になったそうだ。

そこから少し歩くと、お昼のお弁当が出た。その休息時間にAさんに声をかける。初めて名を訊いた。『足は治りましたか？』と尋ねたら、『まだなんです。でも、早く治して来年箱根に挑戦したい』と。また、『京都の三条大橋まで歩くつもりだ』という勇気ある言葉をもらう。」その名を矢尾板さんが知りつつ敢えてAさんと呼んでいるのかと僕は考えていたが、そうではなかったのだ。僕が彼の立場であっても、確かにすぐには本名を訊けなかったろう。

「さて、午後の行程で道が蛇行し、広重が描いた吉原名物『左富士』が現れる。東海道が一瞬北東へ向かうためにこんな珍しい風景が生まれたのだという。・・・この吉原宿と前の原宿ほど土地の悪条件と戦った場所はないだろう。特に吉原宿の人々は津波で二度も宿場を破壊され、更に日本三大急流の一つである富士川とも格闘しなければならなかった。富士川といえば、平家軍が水際から飛び立った鳥の羽音を源氏の軍の襲来と間違えて逃げ去ったという伝説でよく知られている。いわゆる富士川の合戦だ。ところが、この伝説の記念碑『平家越の碑』は今の富士川より6キロも手前にある。この川は豪雨の度に流れを変えてしまったのだ。

明日渡る富士川が今のように南に直下するようになったのは、岩本山の南に『雁(かりがね)堤』という堤防が築かれてからである。江戸時代の延宝年間のことだ。この堤防は、水の勢いを弱めるように工夫されていて、Wのような形をしている。ちょうど雁(かり)が飛ぶような形なのでその名がつけられたという。」矢尾板さんのこの部分の旅日記には、広重の「左富士」からW形の「富士川」の記述がある。彼に送ってもらった雪を頂く富士の写真は雄大なものであった。北斎や広重の富岳百景をふと思い出した。一方、荒れる富士川の流れを「雁(かりがね)堤」でうまくコントロールした話は初耳である。大井川と同じく富士川も、東海道を往来した旅人にとっては、似たような難所であったらしい。いみじくも矢尾板さんがうまく表現したように、人々は「富士川と格闘」していたのだろう。昔の人のその壮絶な「格闘」ぶりが忍ばれる。

「今日は快晴に恵まれ、美しい富士山を拝めたが、午後にはだんだん天候が悪化し気温も下がってきた。私は最後尾を篠澤さんと歩いていた。以前から考えていたことだが、『明日終わったら一緒にお茶しませんか』と誘ってみた。あっさり『いいですよ』との返事だ。米沢に来た時偶然私を見かけたというから、少しは私に関心をもってくれていたのかもしれない。そして今日のゴールに到着。19172歩。そこからバスで夕食会場へ。旅の解放感もあり、みんなお酒で盛り上がる。そこから再びバスでホテルへ直行。そのロビーでまた酒盛り。特にMさんはウィスキー用スキットル持参で気合が

入っている。そうして初日の夜が過ぎていった。」一泊の旅になると、参加者はやはり大いに飲むようだ。矢尾板さんも快く酔ったことだろう。僕は殆ど酒を飲まないのも、理解できるのはその気持ちだけである。

「翌朝起きて窓の外を見たら、あいにくと雨模様。ホテルで朝食を済まし、バスで昨日のゴールへ。今回は東京組、横浜組が同じバスなので、ウォークリーダーが二人いる。みなさんは用意よろしく雨合羽やポンチョをリュックに忍ばせてきている。私はというとダサい携帯傘。歩き始めて1時間で富士川の渡し場に到着した。昔は橋がなかったので、一人16文、荷物30文、人馬一緒に19文を人足に払ったそうだ。今は富士川橋を歩いて渡れる。雨のためか水が濁り、水流にも勢いがあるようだ。そこからまた小一時間歩いて『ツル家』に着く。東海道三大餅といわれる『栗の粉餅』の店だが、江戸時代の茶店にガラス戸をはめたような作りだ。主催者のサービスで一個試食させてもらう。栗を刻んで餡を混ぜ、外側の餅も伸びるので美味しい。その後新幹線の下を横切ったり、東名高速に沿って歩いたりして、ひたすら歩きを楽しむ。そして広重の『夜の雪』で有名な蒲原に入る。53次の絵の中でも唯一雪景色が描かれたもので、深々とした雰囲気が伝わってくる絵である。

ここからはバスで昼食場所の『道の駅富士川楽座』へ。とはいえ、駐車場を借用して『竹取物語』という洒落た弁当を食べる。午後は蒲原宿を歩く。妻籠宿ほどではないが、昔の風情が残っている。先を急いで小雨模様の道をひたすら歩き、15時半に今日のゴールである由比本陣公園に着く。21183歩。広重美術館を見学してからバスで東京へ。19時45分東京駅到着。

皆さんと別れた後、篠澤さんと私は、丸ビルの椿茶房でケーキとコーヒーで二人だけのご苦労さん会をした。私が紀行文を書いている秘密を誰かと共有したい気持ちもあった。天真爛漫な篠澤さんは影のいい協力者になってくれそうであった。」

矢尾板さんにとっての「秘密」が、このような形で公開されているとは、おそらくツアー参加者の誰一人として夢にも思っていないだろう。しかし、誰かに害があるわけではないので、それは彼の秘められた喜びのようなものと考えてよいかもかもしれない。そして、今回は彼自身が「東海道中膝栗毛」の中の「蒲原より由比へ一里」の段の現代語訳を紹介している。一泊した折のおじさん達の夜の宴会の江戸時代版というべきか、ツアー道中の空気をよく伝えているそうである。

蒲原宿で弥次さん北さんと同じ宿に泊まった六部さんとのやりとりだ。六部とは、「膝栗毛」の解説によれば、日本六十六カ国の霊場を遍歴し、国毎に法華経一部ずつをおさめることから出た名だという。六部「なんのなんの、箱屋をおっ始め申したは、重箱だ、櫛箱だあ、いろいろな箱どもだあ、やたら仕入れて、それを売り捌くつもりだったあ」弥次「はてね、風吹いて桶屋、いや、箱屋がもうかるとは、どんな工夫なの？」六部「さればさあ、あつしが思いつきにゃあ、こう毎日毎日、やたらに風吹いて、お江戸はすごく砂ぼこりが立ちもうすから、おのずと人様の目に砂が吹きこんで、目玉のつぶれる者がたんとできるだんべいと思った。世間のわかめくらは三味線でもしなさるべい。すると、三味線屋が繁盛。胴張り用に猫どもが殺されるべいから、ねずみがやたらに荒れまわる。世間の箱どもをみんなかじってしまうべい。はあ、そこで箱屋商売おっ始めたらもうかるべいと、財産のあるきり、箱どもを仕入れたと思わっしやい」弥次「こりゃあいい思いつきだ。おおかた飛ぶように売れやしたろう」六部「いいや、ひとつも売れるもんでない。しよせん、はあ、運のなかったこととあきらめて、一念発起しましてのお、六部になりもうした。とかくこの世は思うようにならぬもんだあ、みなの人衆」。なるほど、特に最後の「とかくこの世は思うようにならぬもんだあ、みなの人衆」という部分が、何となく現代のおじさん達の夜の宴会の様子を彷彿とさせる。53次の参加者の中でも、特に男性は大なり小なりそう思っているのではないか？そして江戸時代の巡礼者・六部のように歩いている。

矢尾板さんの旅はますますおもしろくなってきた。今回はA子さん、Bさんも登場し、現代の六部さん達も登場した。次回のツアーでどんなエピソードが飛び出すか大いに楽しみである。

【電計2017年10月号】

【題名：東海道53次ウォーク(12)】

「今回は東京組18名、ウォークリーダーの山本さん、添乗員の篠澤さんと永森さんが参加した。7時25分バスは東京駅前を出発、途中横浜で横浜組17名を乗せて、一路由比川駐車場へ。車中の山本さんの話では、今日のメインは薩埵峠(さったとうげ)だそうだ。標高86メートルほどの峠なのだが、そこからの富士の眺めが最高だと。10時55分ウォークスタート地点に到着。都合により、ここで早い昼食弁当を食べる。名物の桜エビのかき揚げ天丼だ。おいしい。」

僕は薩埵峠(さったとうげ)峠という場所を知らなかった。しかも、そこから眺める富士の姿は最高だという。東京にも富士見坂という場所が少なくないが、この峠は特別に富士の眺望がいいらしい。「11時55分、エイエイオーとの気合を入れて出発。ここでA子さんと少し話す間があった。『昨年7月に足の手術をしたので、箱根のウォークには参加できなかった。それに動脈瘤と関節の手術をしたので今はリハビリ中。それでびっこを引いているんです』という。そんなハンディを乗り越えて京を目指すのだからすごい意欲だ。ちなみに、B子さんは、体調不良のため、今日のウォークをキャンセルしたらしく残念である。」今回B子さんが不参加だったのは僕も残念に思う。それに比べて、びっこを引きながら歩くA子さんの意気込みは大したものだ。その心の内を少し覗いてみたい気もする。

矢尾板さんの旅日記は続く。「道が少しずつ昇りになってきた。いよいよ薩埵峠(さったとうげ)にさしかかった。その手前に江戸時代からのお休み処がある。『望嶽亭藤屋』という名で、古くて頑丈な作りである。私たちは30分ほど見学させてもらった。私にとって今回のハイライトはこの店だ。24代目の松永さんという人が現在の経営者で、広重の隷書版五十三次の『由比』にこの店が出てくる。『望嶽亭』の名の通り、富士と海の眺望がすばらしかったのだろう。それより驚いたのが、この店は幕末の歴史の舞台になっているということだ。慶応4年(1868年)、勝海舟の命を受け、西郷隆盛との交渉のため府中に向かっていった山岡鉄舟は官軍に追われ、藤屋に助けを求めた。主人は彼を土蔵に隠し、隠し階段から浜へと逃がし、漁師に変装させ、舟で江尻宿へと送ったという。その土蔵は今も現存していて立派なものだ。その後は、あの清水の次郎長が鉄舟を守り、彼は無事に使命を果たすことが出来たのだ。」

僕には初耳のことばかりである。特に、山岡鉄舟をめぐる、清水の次郎長の名まで飛び出すとは思わなかった。まさに教科書に載る歴史の舞台裏の話といってよい。しかも、幕末は比較的新しいので信憑性が高い。矢尾板さんはとても有意義な旅を楽しんでいるようだ。そして、「藤屋」の経営者が24代目であるということにも驚く。このような店は30代、40代と続いてほしいものだ。「藤屋を出る時に雨が降り出した。富士の見えない薩埵峠越えになる。晴れていればその絶景を書きたかった。……いよいよ今日の最後の見学場所である『清見寺』を訪ねる。この名刹は興津の宿場であって、威厳のある姿を保っている。この寺が立つ位置には、その昔、大和朝廷によって東北のエミシに備えて関所が置かれていたという。徳川家康が幼年時代に教育を受けた『手習いの間』があり、また、境内全域が朝鮮通信使関係史跡に指定されている。『清見寺』は、この高台から、東国武士の反乱や戦国武将の群雄割拠、宿場や景観の移り変わりを見続けてきた。なお、興津の宿は、明治から昭和初期にかけて、西園寺公望、井上薫といった政府要人の高級別荘地であった。この時期が興津の全盛期で、モダンな洋風建築、洋食店などが立ち並び、保養客でにぎわったという。中でも、清見寺近くにあった西園寺公望の坐漁(ざぎょう)荘は有名だ。坐漁とは太公望が茅に座して漁をした故事にちなむ。最後の元老といわれた西園寺のもとには総理や政府の重臣が通い、『興津詣で』という言葉が生まれたほどであった。」

あいにくと雨模様で、矢尾板さん達は薩埵峠から富士を見る事が出来なかった。特に東海道筋には富士の絶景を眺められる場所が何ヶ所かあるようだ。その中でも薩埵峠は最高の場所なのだろう。雨は旅に付き物である。残念だが仕方がない。興津宿が西園寺公望、井上薫といった政府

要人の高級別荘地であったというのもおもしろい。富士の眺めがいいので高級別荘地になったの
だろうか？しかし、僕が矢尾板さんの旅日記を読んだ限りでは、今は昔の物語といった感がある。
「夕方急に気温が下がってきた。16時55分この日のウォーク終了。約10キロ、朝の集合場所までの
歩きを含んで21011歩であった。旅館に一泊。翌日は一転快晴。しかし、全国的に寒波が到来して
いるようで寒い。寒いからひたすら歩く。歩いていて、何度か東海道線の踏み切りを横切ったが、風
が冷たく、体が冷えて余裕のない一日であった。それでも天気がよくて富士山を拝むことが出来た。
15時5分、ゴールである静岡県埋蔵文化センターに到着。約11キロ、17932歩であった・・・今回の
旅も無事に終わった・・・東京へ向かうバスの中でほっとする。充実感を味わう。」

今回の旅日記は、昨年1月23日から24日にかけてのもので、23日の夕方から寒波で寒くなった
ようだ。そういう中でも歩け々々が企画ツアーというものなのだろう。実際に歩くことに専念してい
れば、寒さはそれほど気にならなくものだ。矢尾板さん自身が述懐したように充実感すら湧き出すの
は自然なことのように思える。そして、東京組も横浜組も一人の脱落者も出さなかった。A子さん
もびっこを引きながら歩き続けたのだろう。彼女にも充実感があれば、それを訊いてみたい気がす
る。びっこを引きながら、次のウォークでも歩き続けてほしいものである。今回は体調不良で不参
加だったB子さんにも次回は是非とも参加してほしい。矢尾板さんも心の底でそれを願っているに
ちがいない。A子さんとB子さんという二人の女性と彼の心の交流に僕は大きな関心を寄せてい
る。

【電計2017年11月号】

【題名：東海道53次ウォーク(13)】

矢尾板さんの今回の旅日記はこのように始まる。「田子の浦からは一泊二日の行程になっ
ている。東京から遠くなるほど、バスでの移動時間が長くなる。そのバスの席はあらかじめ主催者
に指定されてしまう。偶然私の前の席がB子さんだった。『前回はお休みでしたが、どうした
んですか？』という質問が最初の挨拶だ。『明け方突然お腹が痛くなって動けなかった。月曜
に病院で腸炎と診断されました』とのこと。」

僕は「腸炎」という病気のことには詳しくないが、Bさんは今回のウォークに参加したのだから、
それほど重いものではないのだろう。それにしても、これまで決して休むことのなかった矢尾板
さんは元気そのものである。これからもそうあってほしいと願わずにはられない。

「今回は、東京組17名、横浜組19名の計36名。二日間の旅になる。足柄PAで休憩した時、A
さんに前回撮った写真を手渡す。そのついでに名(苗字は知っていた)と住所と電話番号をもら
ってしまった。東京駅からバスで約4時間かけて駿府城に到着。この城は、三重の堀に囲まれ、
天守閣は、かつての江戸城の天守より大きかった由。後日ここから江戸に移った人々の街が
駿河台という地名になったという。」

東京の学生街で有名な駿河台という地名の起源を僕は初めて知った。これまでも、駿府と
何か関わりがあるのかな？と考えたことはあるが、特別に調べてみることもなかった。実際
のウォークに参加していると、ガイドが実に様々なことを教えてくれるものだ。

「さて、そこから、バスで、前回のゴールである静岡県埋蔵文化センターに戻り、午後2時
頃から歩き始め、再び駿府(府中宿)に。江戸時代の駿府は、東海道有数の大きな宿場で、
3600メートル程の長さだったという。そして、この町で東海道は5度曲がる。私達はそこ
を実際に歩いて5度曲がった。17時30分に安倍川の川会所に到着。約9キロ、13592歩の
行程であった。」

ここで、矢尾板さんの旅日記には、「東海道中膝栗毛」の弥次さん・喜多さんが、「二丁目」
という歓楽街に繰り出した様子が描かれている。残念ながら、紙数の関係でその様子をここ
で紹介出来ない。ただ、安倍川に渡し人足がおり、法外な渡し賃を要求することが多か
ったようだ。それでも、良心的な者もあり、財布を落としていった旅人を追いかけて、
それを戻してやったエピソードが残っ

ているそうだ。この話は、戦前の学校の教科書にも載り、安倍川手前に、「安倍川義夫」の大きな顕彰碑が立っているという。このエピソードも僕には初耳である。おそらく読者諸氏も同様であろう。昨今、徳川時代のそのような美談を聞くことは絶えてない。歩きながら本を読むあの二宮金次郎でさえ、今の学校では、「危ないから、歩きスマホをやるな」という逆説的戒めに変えられてしまったのだ。僕は、金次郎を手本にせよと教えられた世代なので、何とも複雑な気持ちである。

旅日記は続く。「今晚の夕食会場は鞠子宿にある『丁子屋』だ。そこにはバスで移動。この店は、とろろ汁で有名で、今回のウォークの目玉の一つである。酒好きのおじさん4人が一席を独占。お爛プラスS氏持参のペットボトル入りの大吟醸で大いに酔っていた。その晩はホテルルートイン藤枝北に泊まる。翌朝8時ウォークスタート。安倍川の橋を渡る。この川ゆかりのものに安倍川餅がある。ある男が、上流で金がとれたので、『きな粉』を『金な粉』と洒落て、徳川家康公に献上したところ、そのおいしさに舌鼓をうった家康公が『あべかわもち』と名づけたとされる。その後、道なりに進むと、再び鞠子宿に至る。そこの名物茶屋・鞠子（現在は丸子と書く）でおいしいとろろ汁が出るそうだ。昨晚の夕食会場『丁子屋』で一休み。」

今回のウォーク企画は行きつ戻りつで少し分かりにくい。そこでそれを整理してみよう。まず、バスで東京・横浜から駿府城へ。そこからバスで静岡県埋蔵文化センターに戻り、そこから徒歩で再び駿府へ。当日は、駿府の先にある安倍川の川会所から、鞠子宿の『丁子屋』までバスで移動して夕食。藤枝北のホテルに泊まり、翌日、徒歩で安倍川を渡って、再び鞠子宿へ、という行程だ。『丁子屋』の敷地内には、松尾芭蕉が『梅若菜丸子の宿のとろろ汁』と詠んだ句碑が建つ。広重の五十三次版画でも、弥次さん・喜多さんが、縁台に腰を下ろして名物のとろろ汁を啜っている。彼等がそこで休んでいると、赤児を背負ったお内儀がお代わりを運んでくる。広重の版画には梅の花咲く早春の茶店風景が描かれている。ちなみに、この店のご主人は今14代目だそうだ。

B子さんは、元気に集団の先頭を歩き、常にベストポジションでパチパチ写真を撮っている。宇津ノ谷峠前の道の駅で昼食。この峠は、全国でも唯一各時代の道が残っている。江戸時代の『鴛の道』、『明治のトンネル』、『大正のトンネル』、『昭和のトンネル』、『平成のトンネル』と。それが全部使用可能なのだそうだ。最後の二つは幹線道路の上下線でそれぞれ使用されている。

そうしてとにかく峠を越えた。そこが今回のゴールである。時刻は午後2時。距離にして約10キロ、16666歩であった。ところで、A子さんは、びっこを引きながら、2本のストックと消炎スプレーの力を借りて、峠を越えることが出来た。その日、バスで東京駅に着いたのは18時30分であった。」

今回もA子さんとB子さんに関する記述がある。特に、A子さんは、「びっこを引きながら、2本のストックと消炎スプレーの力を借りて、峠を越えることが出来た」。何やら悲愴感すら漂う表現だ。それが矢尾板さんの率直な印象だったのだろう。僕の印象では、A子さんには何か意地のようなものがあるにちがいない。いつの日か、矢尾板さんが、彼女の心の内の風景を見ることがあるかもしれない。一方、前回「腸炎」で休んだB子さんは、「元気に集団の先頭を歩き、常にベストポジションでパチパチ写真を撮っていた」。東京組17名、横浜組19名の計36名は頑張っている。矢尾板さんもその一人だ。A子さんとB子さんが次回はどう歩くか？僕はそれにも無関心ではられない。

【電計2017年12月号】

【題名：東海道53次ウォーク(14)】

「いつも通りに東京駅近くの丸ビル前に集合。添乗員の篠澤さんが迎えてくれた。4月の晴天で、ウォーキング日和だ。7時25分に東京組を乗せてバスが発発する。今回、単独参加の男性5名は、最後尾の席と定められた。バスは、横浜の天理ビル前で、横浜組と山本ウォークリーダーを乗せ、前回のゴールへと向かう。東京組17名、横浜組17名と、山本リーダー、篠澤ガイド、そして、バスのドライバーは何と『みらい観光』の社長さんだ。バスは前回のゴールである『道の駅宇津ノ谷峠岡部

上り』に到着。準備体操後、拳を高く掲げ、エイエイオー！と気合を入れて出発。」

晴天のウォーキング日和に、「拳を高く掲げ、エイエイオー！と気合を入れて出発」とは、さぞかし気持ちがいいことだろう。矢尾板さんに送ってもらった写メを見ると、参加者全員が元気に拳を高く上げている。今回も、全員が、大いに歩いて、矢尾板さん共々快い疲労感に浸るにちがいない。「少し歩いた所で、篠澤さんからリクエストされていた『電気計算 2016.4月号』のコピーをそっと手渡す。これで見守り協力員になってもらえるかもしれない。」

矢尾板さんの旅日記が、僕のコメント付きで、ようやくこの「電計」に載ったのだ。これからしばらくは隔月で掲載されるスケジュールである。来年になると、毎月の予定だ。それにしても、ガイドの篠澤さんが「見守り協力員」とはおもしろい。自分たちのウォークぶりの様子が、この短い紀行文で人目に触れるのだから、ガイドとしてやはり気にならないはずはないだろう。

「すぐに岡部宿の『大旅籠柏(かしば)屋歴史資料館』に到着。ここでベンチに座って昼食だ。隣の藤枝宿の名物『瀬戸染飯(そめいいい)』を食べる。餅米がくちなしで黄色く染まっている。同じベンチにAさんがいたので、どうして53次ウォークにチャレンジしたのか聞かせてくれ、と頼んだ。了承してもらえたので、番外編で訊いてみたい。今日は暖かい。ウォーク途中の桜も目を楽しませてくれる。青空と山々の緑と麓の桜のピンク色は日本人が好きな光景だ。藤枝宿を通り、平坦な道を歩いていると、急に腹が痛み出す。トイレに行きたいが、近くにコンビニはない。それを我慢しながら歩く。夕刻になって『大慶寺』に着く。ここには日蓮上人ゆかりの『久遠の松』がある。トイレのマーク表示はなかったが、山本リーダーが出てきた場所がトイレのようだ。思わず私も飛び込む。神の恵みであった。『カミに見捨てられたら、自らの手でウンをつかめ』というダジャレを思い出す。トイレから出ると、篠澤さんと出会い、早速、御朱印帳、要りますか？と訊かれたので、お願いします、と答えた。ありがたいことである。17時5分、ゴールの『勝草橋』に到着。周囲は桜の名所で、大勢の花見客が集まっている。距離10キロ、15722歩であった。」

今回、矢尾板さんは、ウォークの途中、突然の腹痛に襲われてあせったようだ。僕にも似たような経験がある。そのような時、頭の中はトイレのことしかない。ただ、腹痛といっても色々あり、大便の激しい便意から本格的な腹痛まである。僕の場合は、田舎道での激しい便意であった。周囲に誰もいない一人旅だったので、結局、我慢せず、いわゆる野グソをして済ましてしまった。さあ、矢尾板さんの場合はどのような腹痛であったのか？とにかく、トイレのある『久遠の松』まで我慢出来たのは幸いであった。そこにトイレがあったのは、まさに「神の恵み」だったろう。

「その夜は『ルートイン焼津インター』に宿泊。翌日は、8時に起床して準備体操。更に、再び、エイエイオーと気合を入れて、8時30分に歩き始める。平坦な道をどんどん歩き、島田宿に入って、『大井神社』に参拝する。この島田には『常まつり』という奇祭があり、日本三大奇祭の一つになっている。祭の主役は大奴と呼ばれるカブキ者だ。金襴の化粧廻しをつけ、足元には脚絆とわらじ、左右の腰には2メートル近い太刀をさし、これに錦の丸帯を一本ずつ掛け、唐傘をさして練り歩く。昔は簡素だった祭礼も、次第に派手になり、今では、大名行列、御神輿、鹿島踊り、屋台行列と、3キロにも及ぶ行列が練り歩く絢爛豪華な大祭になった。」

そして、53次ウォークは、いよいよあの太刀川にさしかかる。「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ太刀川」といわれたあの大河である。

「しばらく歩くと、太刀川の『川会所』に到着。島田宿は太刀川の渡し場を擁する宿場なのだ。ガイドの説明によると、川越えとは費用がかさむもので、安政八年(1779年)の尾張藩の大名行列では、この大河を渡るのに、約100両(約1000万円)もかかっている。江戸時代には、約150家もの参勤交代があったというから、宿場に落ちた収入は莫大な額である。更に、雨季には水かさが増して、28日間も川留めになり、宿場は大盛況。川役人も収入を見込んで、中々川留めを解かなかったという。川沿いにある『島田市博物館』が今日のゴールである。約10.3キロ、歩数17380歩であった。ここで博物館情報の一つ。島田といえば、『島田髻』を連想する人がいるかもしれない。これは日本髪

代表的結い方だが、島田宿の遊女が考案したといわれているそうだ。

A子さんは相変わらず先頭を歩き、ここぞと思うベストポジションで写真を撮りまくっていた。その姿にはサングラスがよく似合う。B子さんは、エアサロンパスをリュックに忍ばせ、時々それを取り出してシューと脚に吹きかける。だから彼女の周囲には消炎剤の香りが絶えない。

帰りのバスでは、無事完歩した満足感、充実感、疲労感が、重なり合ってバスの振動と共に体内に染み込んでいくようだ。」

矢尾板さんを初め、一人の脱落者も出さずに、ウォークが終わった。今回のハイライトは何といっても大井川である。僕が今まで知らなかったことが、ガイドから矢尾板さんに、更に、矢尾板さんから僕に、そして、読者へと伝えられた。島田宿とは東海道筋の宿場の中でもユニークな立ち位置にあったらしい。一方、矢尾板さん達の53次ウォークは道半ばである。これから、四日市、亀山を経て、京都まで続く。僕は今彼がどこかでまた腹痛を起こさぬように願うばかりである。

【電計2018年1月号】

【題名：東海道53次ウォーク(15)】

矢尾板さんの「旅日記」はいつものように始まる。「集合場所である丸ビル前に集まり、定刻にバスが出発する。今回のチームリーダーは山本さん、添乗員が永森さん、ドライバーがみらい観光の北田さん。東京組18名、横浜組15名である。それに、羽鳥さんという黒子役の人がいる。この人は、お昼の弁当やスタンプ帳のスタンプ(宿場を制覇する毎にスタンプが一つもらえる)を運んでくれるのだ。さて、今回はちょっと脱線する。あのA子さんのことだ。以前に彼女の住所をおしえてもらっていたので、その住所に米沢名物の鯉の甘煮を宅急便で送った。彼女が京都まで歩けますよという願いと共に。鯉の甘煮は我が地元・米沢では滋養強壮のお祝い食なのである。ところが、翌日になって、業者から住所に該当がないという無残な連絡。あわてて、携帯電話に連絡してみたが、通じない。ショックであった。どうしたものか？悔しい思いもあり、今回のウォークでちょっぴり意地悪を試してみようと思っていた。どんな返事が返ってくるか、楽しみにしていたのだ。ところが、そのA子さんが今回参加していない。肩透かしを食ってしまったのである。体調を崩したのではないかと逆に心配になってしまった。彼女とのやりとりは次回のお楽しみとしてとっておこう。」

あのA子さんが矢尾板さんにでたらめな住所と携帯電話番号をおしえたとは、ちょっと信じられない話だが、実際にその通りだったとは驚く。矢尾板さんならずとも、ショックを受けるだろう。僕自身にそのような経験はないが、矢尾板さんの気持ちは痛いほどよく分る。僕でも少しは意地悪をしたくなるかもしれない。住所や電話番号をおしえたくなければ、うまく断ればいいものを、わざわざでたらめなものをおしえるとはいただけない。

さて、今回の本題に入ろう。「バスは11時20分に大井川にかかる蓬莱橋に到着。897.4メートルの世界一長い木製の橋だという。この橋は東海道筋から外れているが、よく知られているので立ち寄ったのである。橋の上を歩き始めたが、あまりに長いので途中で引き返した。それから青畳のような牧の原台地の茶畑の間を歩く。何とも壮大な眺めだ。ただし、この地が今のような大規模な茶園になったのは明治以降で、それ以前は細々と栽培される程度の荒地だったようだ。」

矢尾板さんは、これに続く「旅日記」の中で、大政奉還で失職した旧幕臣達が茶園の開墾を始めた様子を細かく語っている。字数制限でそのすべてを紹介出来ないなので、部分的に紹介しよう。「・・・維新と共に同じく失職した大井川の川越し人足たちが加わり、千名以上が大挙して牧の原台地に繰り出した。陸に上がった川越し人足にとっても、初めて野良仕事をするサムライにとっても、茶園の開墾は想像以上に厳しかった。武士たちは紋付・袴、定紋つきの陣笠、うしろ鉢巻で、慣れぬクワをふるっては尻餅をつき、『いやいや、某殿、これはあっぱれなお姿』、『いやいや、そういう貴殿こそ』などと笑い合ったというが、心は真剣そのものであった。」

なお、今の牧の原台地の茶園は5千ヘクタールに及び、世界一長い木橋である蓬萊橋は、大井川を越えて茶を運ぶために造られたそうである。長さも「ヤナクシ」とも読め、長寿を祝う意味も含まれているという。あの「越すに越されぬ大井川」に、そのような橋がかけられていたことなど、僕は全く知らなかった。自分の不勉強ぶりを痛感。ちなみに、矢尾板さんは「蓬萊橋」の写真をLineで送ってきてくれた。実に風情のある古い木橋である。造り替えられていなければ、100年以上は経っているのでないか？

さあ、「旅日記」は佳境に入っていく。「16時30分にはゴールの『さんぼ茶屋』に到着。約6キロ、12064歩だった。味処丸尾原でのビールがうまかった。ここでは、お茶御膳、お茶の天ぷらに始まり、おちゃのしゃぶしゃぶ・・・向かいの席にはS子さん、その隣にOさんがいて、話が盛り上がり、夜のホテルで二次会をやるということになった。二次会は男性陣3名、女性陣6名で、9名の酒盛りとなる。全く違う人生を歩んできた人達が、このウォーク企画を通じて偶然出会う機会をもったのだ。今後、旅が2泊3日になったら、夕食後、別に会場を予約して、二次会をやるという話も出る。」

メンバーはすでに15回互いに顔を合わせている。夕食時は酒が入るので、盛り上がりやすい。「旅日記」からはその楽しい空気がよく伝わってくる。

「翌朝8時25分には、昨日のゴールである『さんぼ茶屋』から出発。坂道の茶畑の中を歩く。途中に金谷坂石畳と呼ばれる峠のような場所があり、大汗をかきながらそこを越えた。そこは何と東海道三大難所といわれていた所だそう。そうしてようやく日坂宿に入る。すると、ガイドが、もう少し歩くと、『事任(このまま)八幡宮』に着く、何でも願い事がかなう、と言う。それならばと『御朱印』をいただく。この境内に入ると、5月の風が吹きぬける。汗ばんだ肌に爽やかであった。願い事がかなうとはこういうことか？ランチの後はひたすら炎天下を歩く。15時15分ゴールの『掛川城』に到着。12.6キロ、23475歩であった。ここで1時間ほど城内を見学する。山内一豊の城だ。そして16時30分に掛川を出発。バスの振動が心地よい。炎天下のウォークで完歩した充実感・達成感と疲労感が重なり、バスの振動と共に心に深く染み込んでいく。」

矢尾板さんは今回も心ゆくまでウォークを楽しんだようだ。彼の万歩計も大いに役に立っている。今回は12064歩+23475歩で、合計35539歩である。それだけ歩けば、「炎天下のウォークで完歩した充実感・達成感と疲労感が重なる」のも領ける。しかも、壮大な茶園の眺めは滅多に見ることがない。それに、幕末明治期に茶園を開墾した元武士や人足達のエピソードも爽やかである。

特に、ウォークに参加したメンバー同士の交流の様子が、前回あたりから少しずつ描写され始めていて興味深い。A子さんの件も次回にどうなるか興味津々だ。矢尾板さんの旅はまだ々々道半ばである。これからは場所によって2泊3日もあるらしい。僕も大いに楽しみにしている。

【電計2018年2月号】

【題名：東海道53次ウォーク(16)】

早速矢尾板さんの旅日記に入ろう。「東海道53次の日がやってきた。同じパターンの行動をとっていると、人間はそれに慣れてしまう動物のようだ。目覚ましが鳴る前にちゃんと目覚める。

メンバーも心得たもので、集合時間前にはちゃんと集まっている。今回は7時25分にみらい観光のバスが丸ビル前を出発。いつもより5分早い。途中で横浜組を拾って正式にスタートする。添乗員は篠澤さん、ドライバーは北田さんだ。東京組18名、横浜組14名、計32名である。

私は、今回、A子さんが参加していたら、どのように対応しようかと台本を用意し、周到に構えていた。しかし、今回も彼女の姿はない。2回連続の不参加であった。周到な用意といっても、宅配の荷送り状を見せて、ただ「鯉の甘煮、届いてますか？」と訊くだけの話だ。ただのいじわるに過ぎない。自分としては、それをきっかけにして、このツアーに参加したA子さんの真意を聞いてみたかったのである。足の痛みを抱え、最近手術もしたそう。歩行中に消炎スプレーを使ったり、杖を使ったり

し、びっこを引きながら、京都まで歩くとその決意を語っていた。それには、気魄がこもっていたし、私は何がそういう決意をさせたのかを知りたかったのだ。しかし、彼女が次回以降も不参加なら、それは私にとって主役の退場になり、他のメンバーにはただの落伍者とみられてしまうだろう。まことに残念なことだ。」ああ、あのA子さんが今回も不参加であったとは！矢尾板さんががっかりしたようだ。まさか、でたらめな住所と携帯番号を彼におしえたことで、気が咎めたわけではあるまい。彼女は、京都まで歩きたいと気魄のこもった決意を語っていたのだ。やはり足の痛みがひどくなっているのではないか？少なくとも僕はそう考えたい。

「さて、バスは大渋滞に巻き込まれ、1時間40分遅れて、12時50分に前回のゴール・掛川城に着いた。急いでお弁当を食べて13時45分にウォークが始まる。途中、地元ガイドから、『平将門十九首(じゅうくしよ)塚』の由来を聞く。・・・更に、掛川はあの二宮尊徳の出生地だ、と知らされる・・・とにかく今日は暑い。しかも、午後のスタートで調子がくるったままだ。」

このウォークは6月11日だから、これからますます暑くなる。7月、8月のウォークは極めてきついだろう。それでも、矢尾板さんを初めとして、参加者はみんな元気に旅を続けている。メールで送ってもらった写真を見ると、中高年ばかりだ。拍手喝采である。

「ひたすら歩いて、袋井宿に入る。ここは、東海道53次の東からも西からも、ど真ん中の27番目。街道沿いにある『東海道五十三次どまんなか東小学校』という看板が目につく。弥次さん・喜多さんならずとも、旅人はここでひと息ついたことだろう。天橋を渡ると、『東海道どまんなか茶屋』があり、ここが今日のゴールだ。17時45分、距離にして9.8キロ、歩数は15011歩であった。夕食は『袋井観光センター』で地元の名物『たまごふわふわ』を食べる。江戸時代は將軍家へのもてなし料理だったようで、後に新撰組の近藤勇が愛した卵料理だ。確かにふわふわした食感である。」

矢尾板さんの旅日記には、随分とご当地名物が出てくる。彼自身も初めて食べるものばかりで、僕などは耳にしたこともないものばかりだ。参加者には、それもこのウォークの楽しみの一つになっているだろう。しかも、地元のガイドや誰かがその由来やエピソードを語ってくれる。あるいは、矢尾板さん自身がその気になってご当地物語を読むこともあるかもしれない。特に、「たまごふわふわ」がああ近藤勇の好物であったとはおもしろい。新撰組の活動場所は主に京都だった。彼はわざわざそれを袋井宿から京都まで運ばせたのだろうか？例えば、食べ物が腐りにくい冬に早飛脚で運ばせたとか？興味が尽きない。

「その日のホテルは『ルートイン磐田インター』。酒好きな仲間がロビーに集まる。男は3人、女性陣はO子さん、S子さん、T子さんの3人。みなさんがいわば異人交流を楽しんでいるようだ。このメンバーは京都まで行かだろ。翌日8時30分にホテルを出て、『どまんなか茶屋』からウォークをスタート。大日堂・三ヶ野七つ道に出る。特に大日堂周辺は袋井方面が一望できる交通の要所である。鎌倉古道、江戸道(東海道)、人々が質屋に通ったといわれる質道、明治の道、大正の道が残され、昭和の道(国道1号)、平成の道(磐田バイパス)が整備されている。そして見附宿に着く。京都から江戸に下ると、ここで初めて富士山が見えたことから見附という名がついたという。この見附小学校は明治8年(1875)に建てられたもので、現存する日本最古の洋風木造建築小学校舎(5階建て)である。当時の小学校の様子を感じられ、レトロな気分になることができた。15時10分、ゴールであるJR磐田駅近くに到着。9.2キロ、歩数15287歩。

帰りも渋滞に巻き込まれ、東京駅に到着したのは20時45分であった。これからは、スタートもゴールもますます遠くなり、そのうち1回のウォークが2泊3日になる。主催者は新幹線の活用も考えているそう。無事にウォークが終わると、一仕事終えたような気になるから不思議である。みんなこの充実感を得るために歩くのかもしれない。」

矢尾板さん、今回もご苦労さまでした！その充実感を実際に歩いた者だけが感じられるものだろう。「一仕事終えたような」とは言い得て妙である。彼の旅日記にコメントするだけの僕も少しはその感じが理解出来る。しかも、今回のウォークで、参加者は東海道53次ど真ん中の宿場である袋井

宿まで来た。矢尾板さんの充実感もひとしおというところだろう。おそらくそれは大いに爽やかなものだ。矢尾板さんの旅日記からはその感じも伝わってくる。

箱根を越え、大井川を渡り、ひたすら歩いて東海道を京都まで行く。特に真夏はきついにちがいない。暑さで倒れる者がいてもおかしくはない。今回はそのような事故はなかったようだ。僕としても、ほぼ30名全員が、京都まで無事に歩き終えることを願ってやまない。

【電計2018年3月号】

【題名：東海道53次ウォーク(17)】

「連日暑い日が続いている。今回のウォークは炎天下になりそうだ。タオルを多く用意し、着替えもリュックに積み込んだ。

さて、当日、参加者が集合場所である丸ビル前に集まった。ところが、バスは予定時刻になっても発車しない。添乗員さんが車外でしきりに誰かと携帯で連絡をとっている。誰かが遅刻しているらしい。バスは15分遅れで出発。遅刻したメンバーは横浜から乗車した。

A子さんは今回も欠席だ。誰も気にしていないようだが、我が旅日記の主役が欠けるのは大いに気になる。しかし、3回連続で欠席となると、配役から降りるといふことかもしれない。

今回は、東京組16名、横浜組16名で計32名。ウォークリーダーは新顔の緒形さん、添乗員は森永さん、ドライバーはみらい観光の武元さん、そして、後方支援が羽鳥さんというチームで東海道を歩く。車中の情報では、前の山本さんがリーダーを務めた別のグループで、鈴鹿峠近辺で熱中症になった3人が入院したとのこと。また、東京から遠くなるにつれてバスでの移動時間が長くなる。今回は日本平で積んだ昼食を、移動中のバスの中でとることになった。」

別のグループでやはり3名も熱中症患者が出てしまったという。今回のウォークは7月初めで、もう夏の季節だ。矢尾板さん達は当然蒸し暑い中を歩くことになる。

「12時15分、前回のゴール・磐田駅前からウォークスタート。晴れ、気温31度である。江戸時代は暴れ天竜と呼ばれ、舟渡しだった天竜川の「新天竜川橋」を渡る。長い橋である。そのあと、「金原明善生家」を訪ねる。天保3年(1832)、豪農に生まれた明善は、水害で苦しむ住民のために治水工事を行い、その考え方はその後の天竜川治水の基本方針になったという。彼はまた水源地の植林にも力を入れ、杉や檜など292万本の森を作ったともいわれ、これが天竜美林と呼ばれるようになったそうである。

今日は炎天下をひたすら黙々と歩いた。17時25分、汗だくでゴールに着く。11.9キロ、18524歩であった。夕食はホテルコンコルドの「シャンゼリゼ」でバイキングだ。大ジョッキの生ビールが最高。コンコルドは浜松で最高のホテルのようで、料理も豪華であった。Sさんはローストビーフがうまいまいと4皿もお代わりをした。Mさんが注文した赤ワインのボトルも、同じテーブルの6人で飲み干してしまった。宿泊するホテルは「ルートイン磐田インター」。ここで恒例の二次会が始まる。女性陣はO子さん、T子さん、S子さん。男性陣はSさん、Mさん、そして私。東海道を半分以上一緒に歩いた仲間ということで、仲間意識が強くなっている。話題はとりとめのないことばかりだが、この酔いの勢いで京都になだれ込むのだろうか。」

矢尾板さんの旅日記は、「炎天下をひたすら黙々と歩いた。」と語っている。幸い誰も熱中症にならずに済んだようだ。ちなみに8月のウォークは休みだという。誰が考えても当然であろう。さて、暑い中を歩いたあとの豪華な夕食と二次会は、さぞかし盛り上がったことだろう。特に二次会は男女6人の酒盛りである。彼等の仲間意識が強くなっているのも頷ける。矢尾板さんの語るように、彼自身を含めて彼等は、おそらく、そのまま京都まで歩くことになるのではないか。その達成感がどのようなのかに僕は大きな関心を寄せている。それは、参加者の誰もが二度と味わうことのない、いわば、生きる喜びのようなものかもしれない。ひよっとしたら、今回のウォーク参加者の何人かが、いつ

の日かまたウォークすることがなきもあらずだろう。

「翌日は8時40分に昨日のゴールから再びウォークスタート。昨日より暑くなる予報で、実際には最高気温32度であった。浜松の街中を歩くと、高層ビルやマンションが多いのに驚く。浜松の風土については書くべきことが色々あるが、枚数の関係で、特にオートバイに絞って少し書くことにする。浜松といえば、楽器、オートバイと自動車が有名で、全国有数の産業都市である。近代産業への目覚めが早かったが、太平洋戦争で激しい空襲を受け、街の90%が被災という壊滅的な打撃を受けた。しかし、小型エンジン搭載の小型オートバイ(カブ号)は、本田宗一郎が焼け跡の中から生み出した傑作であった。ここでオートバイが爆発的に受け入れられたのは、坂が多く風が強いのも大きな要因だったという。以後、浜松はモータリゼーションの波に乗って、一躍大都市へと生まれ変わっていく。さて、ウォークは炎天下で延々と続く。ゴールは弁天島。そういえば、いつも先頭を歩いていたB子さんが今日は中盤を歩いていた。足の裏の皮がはがれたという。退場しないでほしいと願うばかりだ。ゴールの弁天島近くに舞阪宿脇本陣がある。中に入って見学。江戸時代の状態に復元されている東海道唯一の遺構だそう。大名の泊まる部屋に腰を下ろすと、外の風が肌に気持ちいい。弁天島には15時15分到着。13.6キロ、22906歩。帰りのバスの中で飲んだ缶ビールが実にうまかった。勝利の美酒とはこういう味なのだろうか。この気分を味わうために、大汗をかいて炎天下を歩いたのかもしれない。」

矢尾板さんは旅日記の最後に「勝利の美酒」と言っている。それが彼の率直な気持ちなのだろう。ウォークは彼にとって自分との戦いなのだ。ゴールまで歩き通したこと、それ自体で、勝利という気持ちが入り込んでくるのだろう。それにしても、3回続けて不参加だったA子さんは残念である。B子さんも次回以降の参加に不安が残る。そんな中で、矢尾板さんの飲み仲間はいわば仲間意識で結ばれて元気がいい。「酔いの勢い」で京都まで行くのではないか。少なくとも僕はそう思っている。僕は酒が弱いので、飲み仲間にはなれないが、こういう酒はいいものだと思う。帰りのバスで飲むまい缶ビールも、矢尾板さんにとっては最高級の酒の味なのだろう。参加者のみなさん、炎天下のウォーク、ご苦労さまでした。今回はそれが矢尾板さん達に僕が贈る励ましの言葉である。

【電計2018年4月号】

【題名：東海道53次ウォーク(18)】

今回も早速矢尾板さんの旅日記に入ろう。「暑い真夏はさすがにこの企画はお休みである。9月に入ったら、その遅れを取り戻すかのように開催された。今回から2泊3日の旅になる。いつもの丸ビル前に集合する。今回は、ウォークリーダーが山本さん、添乗員が永森さん、ドライバーが谷上さん、そして後方支援隊が羽鳥さん。参加人員は東京・横浜併せて25名。ゴールが東京からだんだん遠くなり、時間とお金が嵩むようになると、参加者が減ってしまうのかもしれない。残留した我々は筋金入りの53次マニアといえるだろう。」

確かに矢尾板さんの語る通りで、前回は32名が参加した。25名の残留組は相当の53次マニアであろう。おそらくこの25名は京都の最終ゴールまで歩くかもしれない。

「9月2日7時40分、バスが丸ビル前を出発、同日12時15分、新居関所跡に到着。関所見学後、炎天下を黙々と歩く。遠州灘、汐見坂を経由して、16時15分、ゴールの「おんやど白須賀」に着く。6キロ、10870歩、気温32度の行程であった。夕食は料亭「浜采坊」でとる。ここでのビールがうまい。最初に喉を通るその感じは体験者でないと分からないだろう。宿泊はホテルルートイン浜名湖。

翌9月3日、8時20分にウォークスタート。最高気温33度の予想。今日は16キロの長丁場になる。快晴で最初から暑い。白須賀宿を通過し、境川を渡ると、静岡県にお別れして、愛知県に入った。ちょっと感動する。ウォーク途中は一面のキャベツ畑だ。

「二川宿」に入る。そこで「二川本陣」を見学。ここは東海道筋で唯一残った当時の遺構である。

とにかく暑い！タオルを濡らして首に巻き、途中のコンビニでアクエリアスの氷の塊を買って歩き続ける。「吉田宿」に入り、「吉田城」の解説を聞いて、16時30分ゴール。25286歩。足が重く痛い。夕食は「車寿司」にて。ここでの生ビールが実にうまい！渴いた砂に水が染み通るようだ。宿泊は同じホテル。

9月4日。台風が九州に接近中で、天気情報は午後から雨マーク。8時25分ウォークスタート。気温32度。幸いこの日雨は降らなかった。浜名湖のうなぎは有名だが、三河地方もうなぎの名産地の由。ところで、「べっぴん」という言葉は、江戸時代にうなぎのブランドとしてつけられた名だそうだ。「べっぴん」うなぎは飛ぶように売れたとか。途中、「菟足神社(うたりじんじゃ)に参拝。ここは手筒花火発祥の地でもある。13時5分にゴール到着。10.7キロ、17567歩であった。帰りは国府のローン駐車場でバスに。その車中でお弁当と祝杯。東京駅前に19時15分到着。」

矢尾板さんは、今回、敢えて旅の途中の風物や景色を殆ど描写せず、参加者の人間模様を述べる心境になったようだ。何しろ彼自身が「残留した我々は筋金入りの53次マニア」と言っているくらいなので、その個性的な人間模様は中々おもしろい。彼の旅日記はこう続く。

「当初の二元論の一方の主演であるA子さんは途中で自主退場してしまい、一方のB子さんの単独行になると思っていた。今回は、そのB子さんにちょっとした番外編があった。最終ゴール直前2.5キロ付近で、熱中症のためか、羽鳥救急隊のお世話になってリタイアしてしまったのだ。」

さて、二代目A子さんとB子さんを探さなければという思いがあって、2日と3日の夕食後の二次会に参加した。両日ともメンバーは同じで、女性はO子さん、T子さん、S子さん、男性はSさん、Mさん、そして、私。話題提供のため、「電計」に掲載された「東海道53次ウォーク」の(1)と(2)のコピーを5人に手渡す。缶ビールや缶チューハイを空けていると、時節柄、話題はおのずとリオデジャネイロオリンピックに移る。話題の中心は当然日本選手団の活躍である。毎日スポーツ紙を精読しているのか、みなさんは内情に詳しく、まるでスポーツ解説者のようだ。私はおそるおそる聞いているだけ。その情報量を含めて、聞いているだけでも価値がある。

T子さんとMさんは二人とも学生時代にスポーツ選手だったようだ。特にT子さんはバドミントンをしていたが、夢は野球の監督になることだったとか。彼女は現職の看護師らしい。毎日のように睡眠1時間で、各競技の実況中継を見て、応援していたのだそうだ。バドミントンの高松ペア、レスリングの吉田、男子400メートルリレーなどのシーンを思い出しては、感涙の涙を流している。それに劣らず、S子さん、O子さんも幾つかの競技の内情に詳しい。S子さんは「サッカーは国と国の戦争だ」と言いきる。当たらずとも遠からずだと私は思った。そして、彼らの心は愛国心の塊のようなものだった。日本選手の活躍はこのような影の人々の力に支えられているのかもしれない。

一方、3日の昼時のこと、羽鳥さんに求められ、「東海道53次ウォーク」の(1)と(2)のコピーを山本さん、永森さんの3人に渡した。その後、4日の朝食で偶然永森さんと同席した。そこでこんな話を聞かされた。足の悪いあの一代目のA子さんから毎月のように電話をもらい、彼女は是非またウォークに参加したいと語っているという。それどころか、すでに次回のウォークに参加するとの申し込みを受け取っているとのことだ。驚いた！舞台から退場して消えたはずの役者が、再び舞台上がってくるような感動を覚えた。それはあたかも聖書のルカ第15にある放蕩息子のたとえのようであった。次回が楽しみである。」

ああ、あのA子さんが再び戻ってくるらしい。矢尾板さん同様、彼女がウォークに姿を見せることなどもうないだろうと僕も思っていた。ところが、彼女は再び舞台上に上がるというのだ。矢尾板さんがA子さんとどのような再交流をするのか大いに興味が沸く。僕も「次回が大いに楽しみである」。

【電計2018年5月号】

【題名：東海道53次ウォーク(19)】

今回からあのA子さんが矢尾板さんの旅日記に再登場するのが興味深い。

「いつものことながら、参加者は東京駅前の丸ビルに集合した。バスは7時20分に出発。乗車時に見た座席表にA子さんの名前があった。果たして本当に横浜から乗車するのだろうか？・・・彼女は確かに横浜駅前で乗車した。ウォークリーダーが山本さん、添乗員が篠澤さん、ドライバーが井上さん、そして後方支援が羽鳥さんだ。今回は前回より参加者が増え、東京組15名、横浜組14名の計29名である。

事前の案内では、今回の見どころは、御油宿の松並木、大橋屋、岡崎宿の27曲り、八丁味噌、えびせんべい、備前屋の『あわ雪』等の由。行程は9月30日の1日目が9キロ、2日目が14キロ、3日目が7キロ。1日目のスタートは前回のゴールである国府のローソン駐車場だ。ここでようやくA子さんと会話することが出来た。彼女は、『4ヶ月休んだが、また参加できてうれしい』と笑顔で語る。そして、過去2回の欠場の原因は暴飲暴食と疲労による急病によるとのこと。救急車で病院に搬送され、入院はほぼ1ヶ月に及び、そのうち1週間ほどは意識不明の重態であった。そうして少し彼女の話も聞いたあと、例の宅配便の控えを見せ、『届いているか？』と訊いてみた。ところが、彼女は『届いていない』と。」

ここで、少し第(15)回のエピソードを思い出そう。矢尾板さんは、A子さんに米沢名物の鯉の甘煮を送った。京都まで無事に歩けるようにという願いをこめて。ところが、それが届かなかった。結局、彼も僕も、住所はウソで、携帯電話番号もウソだと思い込んでしまったのだ。しかし、それは私達の思い込みに過ぎなかったようだ。

「その時偶然傍らにいた添乗員の篠澤さんが、『たまたま入院中だったからでは？』と助け舟を出してくれた。彼女もまじまじと控えを見て、住所も電話番号も合っているという。そのあと、A子さんはピコタンピコタンと足を引き摺りながら歩く。B子さんは中盤を軽快に歩いている。御油宿と次の赤坂宿の距離は1.7キロしかない。江戸時代には、吉田、御油、赤坂なけりや、親に勘当されやせぬ、という流言があった。3つの宿には53次でも有名な花街があったのだ。

広重も御油と赤坂の客引きと旅籠の様子を描いている。御油で大橋屋を見学する。江戸時代からの旅籠としては、唯一現存する建物で、昨年まで営業していたそうだ。古畳に当時の旅人の様子を感じた。17時20分ゴール。14773歩であった。

夕食は豊川稲荷の門前にある松屋にて。ここのいなりずしは有名で、八丁味噌の煮込みうどんも味わう。そのあと、ホテル・ルートイン豊川インターにチェックイン。二次会には、O子さん、T子さん、S子さん、Sさん、Mさん、Oさん、それに私が参加し、7人で酒盛り。年代時代空間を超越した夜話が続いた。」

最近はずいといつていいほどホテルでの酒盛りがある。ツアーの参加者はお互いに気心も知れていて、さぞかし酒がうまいだろう。そのうち「年代時代を超越した夜話」を是非具体的に聞きたいものである。この「53次ウォーク」にはそのように余分な楽しみがあるようだ。ただ、ホテルでの二次会にはA子さんもB子さんも出していない。酒があまり好きではないのか、あるいは、それほど話好きではないのだろうか？

二日目。降水確率50%で、朝のうち小雨が降っていたが回復した。気温は27度。法蔵寺の見学から始まる。何故かここにあの近藤勇の首塚がある。新撰組の隊士が京から徳川ゆかりのこの寺に運んだらしい。江戸時代はこの地にむらさき麦というものがあつた。『ここも三河むらさき麦のかきつばた』という芭蕉の句碑がある。この一帯は十王信仰が盛んで十王堂が各地にある。十王とは死後の冥界を支配する十人の王様のことだ。さて、A子さんはこの日も姿を見せたがウォークに不参加。病み上がりで足が痛そうだ。今日のゴールは岡崎城の城門。22941歩であった。家康公のからくり時計を見学し、城内を歩く。夕食はおき乃という和食屋にて。『鰻 ひまつぶし』を食べる。ホテルでは昨日と同じメンバーで二次会。その夜の話題は、国際関係、国民性、国情文化、宗教と、とても高尚で、彼らの考え方は健全保守だと思った。」

A子さんが2日目のウォークに不参加とは！やはりまだ足の具合と体力が十分に戻っていなかったのだろう。2日目の行程は14キロで、ほぼ23000歩だ。かなりきつかったのだと思われる。矢尾板さんの旅日記によると、それでも彼女は翌日の最終日に再びウォークに参加したという。「最終日の3日目。岡崎宿の27曲がりを書く。右に左にとくねくね曲がり、途中で数えられなくなってしまった。A子さんは何とか歩いている。更に、八丁味噌という名の工場が岡崎城からほぼ1キロの場所にある。ここはNHKの朝ドラ「純情きらり」の舞台になった所だ。マスコットガールの石塚さんが工場を案内してくれる。工場内には味噌樽が林立していた。一つの樽に6トンの味噌が入っており、その上に3トンもの石がのせられていて壮観である。その後も黙々と歩いてゴールの宇頭茶屋へ。13012歩であった。帰りのバスでは、ビールに弁当、疲れとほろ酔い、そして充足感が、振動でミックスされて至福の気分になる。これは体験した人でないと味わえない権利だと思う。」

今回は僕のコメントより、矢尾板さんとA子さんの個人的面談で締めくくろう。「ウォークから3日後、私は祖師谷大蔵駅前のカフェでA子さんと会うことができた。彼女が語る。今回の入院で、子供たちからはすべての活動をストップさせられた、しかし、53回は反対を押し切って京都まで歩くつもりだ、歩くのが好きだし、やり始めたことは最後までやる、と。」

【電計2018年6月号】

【題名：東海道53次ウォーク(20)】

早速矢尾板さんの旅日記を紹介しよう。

「東海道を歩く日の朝が来た。天気予報によると、今日は雨である。これまで本格的に降られることはなかったのだが・・・7時25分定刻の5分前に、バスは丸ビル前を出発した。今回の編成は、東京組15名、横浜組13名の合計28名である。回を重ねるごとに、みんな顔なじみの間柄になってくる。ウォークリーダーが山本さん、添乗員が永森さん、ドライバーがみらい観光の北田さん、そして、後方支援が羽鳥さんというメンバーで、2泊3日の旅を楽しむことになる。

事前の情報では、初日が8キロで天候は雨、二日目が16キロで晴れ、最終日が6キロで晴れだという。今回の見どころは間の宿の『有松』。ここには江戸時代の街並みが今も残っているそうだ。そして、『桶狭間古戦場跡』。歴史ファンには見逃せない場所である。それにその先に『熱田神宮』がある。バスが東名を走っている途中から雨模様になってきた。そうだからといって今更逃げられない。みんなバスの中で缶詰状態なのだから、一蓮托生の一団で雨の中に突入していく。」

長距離のウォークに雨は大敵だろう。それでも歩かねばならないし、歩きたいというのがメンバー全員の気持ちではないか。今の僕は彼らのそういう心境がよく理解できる。短くても、この紀行文をまとめる僕も、いつの間にかメンバーの一人になったような気がしている。

「12時50分ウォーク開始。雨が強くなってきた。合羽を着て傘もさしているが、衣服が濡れてしまう。靴にも雨が入ってぐしょぐしょだ。この辺りはかきつばたが有名だそうだ。ガイドがこんな説明してくれた。三河の国 八橋というところにいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもで(蜘蛛の足のような)なれば、橋を八つわたりせるによりてなむ、八橋といひける (伊勢物語 第九段)。在原業平が東下りの途次に八橋を通りかかった時の話である。業平は川のほとりの木陰に座って乾飯を食べる。辺りにはかきつばたの花が咲いていた。仲間の一人が、か・き・つ・ば・た・の五文字を詠み込んで歌を作れというので、唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思う、と詠むと、みな乾飯の上に涙を落としたという逸話が残っている。

そうこうしているうちに、今日のゴールである『知立神社』に到着。12037歩。ここは東海道三大神社の一つなのだそうだ。ちなみに他の二つは『三島大社』と『熱田神宮』。夕食は『宇和海』で和食の懐石である。ホテルはルートイン知立。恒例の二次会は私の部屋を会場にして始まった。メンバーは、O子さん、T子さん、S子さん、Sさん、Oさん、Mさん。旅の仲間は親しくなって、その後も付き

合いが長く続くことが多いと、ウォークリーダーの山本さんが言っていた。Oさんが口火を切った会のネーミングを話題にする。百家争乱であったが、なんとなく『歩CALL(あるこおる)会』に収まってきた。みんな歩くのが好きだから、歩くのをコールするという意味とアルコールの合成語である。」

矢尾板さんの親しい仲間が「歩CALL(あるこおる)会」という飲み会を作ったとはいいい話である。みんな酒好きなので、やはりアルコールの匂いが恋しいのだろう。ただ、この会にあのAさんとB子さんがいないのは少し寂しい。

「二日目は快晴。昨晩は部屋で濡れたものをどう乾かすかに苦心した。空気清浄機やドライヤーを使ったりして何とか・・・おかげで今日は快適に歩ける。8時15分スタート。10時50分、『桶狭間古戦場』に到着。ここで戦国の世を終結させる戦闘が行われたのかと思うと感動。この尾張・三河から戦国の3人の英雄が生まれたのだ。碑の前で座って休んでいると、汗ばんだ肌に風が心地よい。

昼頃には『有松』に到着する。ここは日本初の町並み保存運動が行われた土地だそうだ。地元のガイドが50分ほど歩きながら色々説明してくれた。なおこの地は『絞』が有名。お土産に手拭いを購入。午後には『鳴海城本丸跡』を見学。15時45分、ゴールの『笠寺観音』に到着する。24105歩。ちなみに、Aさんは午前中欠場、午後からリュックをOさんに背負ってもらってのウォークであった。夕食は『縁』という和食会場で、16キロも歩いたあとなので食事がうまい。恒例の二次会はSさんの部屋にて。現代版のアルコール入り弥次喜多懇談会である。

最終日は晴れ。8時40分スタート。ここでウォーク中のBさんとの会話を紹介しよう。前にも書いたが、彼女は写真をよく撮る。毎回何枚ぐらい撮るのか訊いてみた。答えは400枚から500枚程。毎回PCにデータを移し、スライドショーにして楽しんでいるという。特に富士山とかマンホールに興味があると言っていた。いつも先頭を歩き、グループ内では常にベストポジションで写真を撮っている。最後尾はAさんが歩いている。これまた大病後なのに、その根性に驚く。

そして、11時35分、『宮の渡し』に到着。ここは海上七里を舟で桑名に渡る場所だ。今日は6キロで、8993歩。宮宿とは『熱田神宮』の門前町であった。『熱田神宮』に参拝する。七五三の家族連れで混雑していた。この名物『きしめん』を食べて、帰りのバスの人となる。大変疲れたが、京都にまた一歩近づいた。」

今回、矢尾板さんは「帰りのバス」で「快い疲労を覚えた」とは言っていない。本当に疲れたのかもしれない。しかし、他のメンバーと同じで、彼も最終ゴールまで歩き通すことだろう。京都まではまだまだ遠いが、「また一歩近づいた」のは確かである。今の僕は矢尾板さんとその心境を少しは共有している。

【電計2018年7月号】

【題名：東海道53次ウォーク(21)】

バスは東京駅前の丸ビル脇から予定通り出発する。東京駅からのバスの旅は、これが最後だと思いと寂しいものがある。次回からは新幹線に乗るのだ。今回の参加者は、東京組11名、横浜組13名で、合計24名である。常連のS夫婦のご主人が脳梗塞で欠席、また、元気な単独参加の大ちゃんが何故かいない。ウォークリーダーが山本さん、添乗員が篠澤さん、ドライバー北田さん、そして、後方支援が羽鳥さんと、いつもの強力布陣である。

13時、バスが桑名宿側の七里の渡し跡に到着。ここには、伊勢神宮の鳥居が下賜されていて、遠く伊勢神宮を遥拝できる。今回の名物は、日永の『なが餅』と日永の『団扇』だそうだ。いよいよスタート。途中Aさんが羽鳥タクシーのお世話になる。やはり無理があるのだろうか。実は、羽鳥タクシーとは我々ウォーク・メンバーの愛称で、彼はレンタカーでお弁当を運んだりして色々な役割を果たしてくれている。53次ウォークにはなくてはならぬ後方支援者なのだ。我々は、7キロの道を淡々と歩いて、ゴールの朝日町歴史博物館に着く。10959歩であった。」

およそ7キロのウォークではほぼ11000歩とのこと。今の矢尾板さんにとってその位の距離は軽いものらしい。僕は友人と東京都内の庭園巡りをしたことがあり、2時間半ほど歩いてやはり11000歩であった。それにしても、歩数を正確にカウントできるとは、便利な器械が出来たものだ。

「その日のホテルはルートイン四日市。恒例の二次会は何と私の部屋で開かれた。O子さんが会員名簿を作って持参。『歩CALL(あるこおる)会』の発足である。歩くのをcallすることと、アルコールをかけた名称だ。その中に、さいたま市民が二人いて、それぞれ大宮派と浦和派だ。いつも真っ二つに分かれてバトルになる。明日は、Jリーグの決勝で、鹿島対浦和だから仲良くすればいいのに、仲間割れするのはおもしろい。また、さいたま市の健康への取り組みがユニークで、朝の体操に参加した人にシールを配布しているそうだ。最高齢のSさんが毎朝5キロ歩いて参加している。

2日目。今日も快晴。ウォーク開始。京都まで残りあと100キロ。途中で、あのA子さんが、足がツルと言いつつ。T子さんが特効薬の18番ならぬツムラの漢方68番を取り出して飲ませた。みんなそのような時のために秘薬を忍ばせているようだ。結局A子さんはまた羽鳥タクシーのお世話になった。今日のウォークで嬉しいのは『なが餅』の笹井屋の存在である。昔と変わらぬ味で営業を続けており、創業は天文19年(1550年)だという。古くは、この先、四日市の日永(ひえい)の追分で店を開いていたが、戦災によってこの地に移転した。『なが餅』の名は日永の『永』からついたものだという。藤堂高虎が足軽時代に『武運ながき餅は幸先よし』として気に入り、津の藩主となった後も、参勤交代の折に立ち寄ったという言い伝えがある。四日市宿で、もう一つおもしろいのは、片面に『すぐ江戸道』、片面に『すぐ京いせ道』と刻んだ文化7年(1810年)の道標があることだ。『すぐ』とは『まっすぐ』という意味だそうである。お昼は四日市の諏訪神社後ろの公園でお弁当を食べる。

またウォークが始まる。ちょうど14時半を過ぎた頃のこと、私の眼の前を歩いていたA子さんが、突然敷き石につまずいて転倒する。驚いたが、大したことはなく、かすり傷で済んだようだ。そして、見落としそうな『日永の一里塚』が眼に入る。記念すべき100番目の一里塚である。京都にまた一步近づいた。15時40分、ゴールのサークルKに到着。21213歩であった。夕食までホテルで過ごす時間があり、風呂に入って汗を流すとさっぱりした。

夕食は『たまゆら南店』で、昨晚とほぼ同じメニューであった。しかし、みなさんの評判は今日の方がいいとのこと。夜の二次会は、地元のサミット酒『宮の雪』を仕入れて、Sさんの部屋で始まる。なんと山本リーダーも飛び入り参加してくれた。テレビでサッカーの試合を見ながら、ワイワイガヤガヤと盛り上がる。この勢いで京都まで突撃！

3日目、日永の追分を見学。ここにも伊勢神宮から下賜された鳥居がある。更に杖衝坂を越えて、石薬師宿に入る。その先に『佐々木信綱記念館』がある。信綱は万葉集を初めとする歌学を研究し、昭和12年に第一回の文化勲章を受章している。我々が最も親しみを感じるのは、信綱が作詞した唱歌『夏は来ぬ』だろう。『卯の花の匂う垣根に・・・』とそれは始まる。ここが今日のゴールで、8キロ、11580歩であった。次回からは東京から新幹線利用となるので、時間がしっかりと決まっています、遅れることは決して許されない厳しい旅になる。」

今回はあのA子さんが思うように歩けなかったようだ。それでも、彼女は諦めず歩き続けるのではないか。これまで矢尾板さんが語った彼女の様子から、僕はそんな気がしている。一方、京都はもう決して遠くはない。次回から、移動に新幹線を利用するというが、それは東京からの距離が遠くなったということだ。さあ、京都に突撃である！

【電計2018年8月号】

【題名：東海道53次ウォーク(22)】

「早いもので53次ウォークは今回で22回目である。あと2回で京都に着く。特に今回は関宿と鈴鹿峠という見所がひかえている。結論からいえば、今回は鈴鹿峠を越えることが出来なかった。実は、

強烈な寒波が日本列島を覆い、二日目の午後から大雪になってしまったのだ。ウォークリーダーの山本さんの判断で三日目のウォークは中止になった。このような強烈寒波は江戸時代もあったろう。当時の旅人は現代人が着るようなセーターもなく防寒ダウンコートもなかった。それを考えると、私達は恵まれている。たとえ大雪の中を歩いても、防寒具で何とか寒さをしのげるのだ。

さて、時間を出発日に戻そう。今回からは新幹線を利用する旅である。東京駅7時26分発のこだま635号がバスの代わりだ。東京駅から11名、品川4名、新横浜8名、小田原2名、そして名古屋から1名で、合計26名である。リーダーが山本さん、添乗員が永森さん、名古屋から愛知バスの荒木ドライバー、影武者が羽鳥さん、というチーム編成だ。車中で我々のウォーク仲間であったIさんが逝去された由の知らせがある。顔と名が一致するので、皆その瞬間にシーンとなった。」

今回から新幹線利用の旅になった。それだけ、東京から遠くなり、京都に近くなったということなのだ。従って、この紀行もあと2回で終わることになる。今回が22回目だから合計で24回である。矢尾板さん達の53次ウォークは2年がかりだったのだ。更に、Iさんというメンバーが急逝したという。矢尾板さんはどんな病気が語っていないが、Iさんはおそらく体のどこかに持病があったのではないかな。僕も冥福を祈りたい。

「11時45分前回のゴールから歩き始める。庄野宿を過ぎたあたりに『山神』の石碑があった。ガイドの話は以下の通りだ。山の神様は春になると麓に下りてきて田んぼにいる、そこで人々が田楽をして神様を楽しませる、お盆には前年の藁を燃やして迎え火とし、終わると送り火にする、秋から冬にかけて神様は山に戻るので、正月は門松でまた神様を迎える。それを繰り返すのだから、『山神』は豊穰の神様ということになる。そして、それは女性をも表すという。『カミサン』の語源だそうだ。

それにしても寒い。吹きさらしの道を歩く。冷たい北風が肌に沁みる。みんなものすごい防寒体制だ。毛糸の帽子、マスクマフラー、それに、サングラスとマスクという姿で、イスラム女性よりすごい格好をしている。北風の中をひたすら歩いて、16時45分なんとかゴールに着いた。11.3キロ、16266歩であった。夕食で、Iさんのために、みんなで献杯をする。熱燗がうまいと言っては失礼か。恒例の二次会に流れ込む。男性3人、女性3人の『歩CALL(あるこおる)会』だ。

看護師のT子さんは、前日発熱したが、53次が命とばかり、それを乗り越えてのウォーク参加だ。そうそう、A子さんもウォークに参加したが、やはり羽鳥タクシーのお世話になった。B子さんは雪を意識してかブーツ姿で参加。

二日目は8時15分スタート。途中古い町並みを残す亀山宿を見学。ここにはカメヤマ(株)という会社があって、よく知られた小さなカメヤマローソクを作っている。宿の旧本陣前を通過。11時頃には小雪が降り始めた。寒い。そして、関宿に入る。昔なつかしい町並みが延々と続き、江戸時代さながらの街道を散策することが出来た。関宿は、東海道で唯一『伝統的建造物保存地区(町並み保存地区)』に定められた地域で、1.8キロある。かつての家屋の造りや並びが、そのままになっており、生きた宿場博物館といってもよい。家々には、かつての商売・職業なども記されているので、宿場の構成も分かりやすい。ここのガイドは、江戸時代からの銘菓『関の戸』の主人で、祖先はあの服部半蔵。彼は『関の戸』の14代目だという。威勢がいいし、格好がいい。観光客の若い女性が彼を追いかけて写真をパチパチ撮っていた。その格好いいガイドによると、俗にいわれる『関の山』の語源は関宿なのだそうだ。宿場を通る街道は実に狭い。関宿のお祭りで山車だしが出ると、ぎりぎりを通る。『関の山』とはそこから生まれた言葉だという。そんな関宿を離れる頃になって、雪が本降りになった。今日のゴールである鈴鹿馬子唄会館に向けて黙々と歩く……誰も口を開かない……雪中行軍とはこのようなものだろう。予定より早く、15時5分馬子唄会館に到着。14キロ、21274歩。

ここで思いがけず地元の人々の鈴鹿馬子唄の披露があった。♪坂は照る照る♪鈴鹿は曇る♪あいの土山♪雨が降る……。これは峠を越える力唄であったのだろう。夜の二次会にはメンバーの6人以外に山本さんも参加。約2時間、53次旅歩きの話で盛り上がった。

そして、三日目。目覚めてホテルのカーテンを開けたら、銀世界がひろがっていた。私はしばらく

部屋で待機していた。山本さんと羽鳥さんが斥候として先を見に行った。その結果、峠越えは無理で、その先も膝上の積雪でウォークは無理との判断になった。

今残っている参加者はT子さんのように53次完歩を目指す人達ばかりである。次回のウォークは計画が変更されて鈴鹿峠からスタートすることになった。ニュースでは、私の故郷である山形の肘折は2.2メートルの積雪だという。」

今回の53次ウォークでは、関宿で雪に見舞われ、翌日は、大雪のために鈴鹿峠を越えられなかったという。2年という長い期間に渡ることだから、冬場にそのようなことがあってもおかしくはない。江戸時代には、大雪が降ったら、一つの宿に長逗留になったことだろう。仮に歩いても、今のような防寒具がないのだから、ぶるぶる震えるばかりだったのではないか。今でも、夏場のカンカン照りと冬場の大雪は旅の大敵なのだ。それでも、現代の矢尾板さん達は完歩をめざして頑張っている。矢尾板さんを初めとするウォークのメンバーに、僕は心から大きな拍手を送りたい。

【電計2018年9月号】

【題名：東海道53次ウォーク(23)】

早速矢尾板さんの語りに移ろう。「季節は3月。まだ春とはいえない。この紀行エッセイの主役であるA子さんは調子が悪そうだ。彼女には以前米沢名物の『鯉の甘煮』を送ったのだが、入院中のため手元に届かなかったことがある。山国の米沢では、正月料理であり、滋養強壯の食べ物である。そこで、もう一度お送りしたところ、無事に届いた。そのお礼の電話の中で、調子が悪い、と言っていたので、今回は欠席かと思っていた。7時33分発のひかりで名古屋に向かう。参加者27名、リーダーが垣内順子さん、(山本さんは所用で欠席)、添乗員が篠澤智子さん、ドライバーがみらい観光の足立修さん、後方支援が羽鳥昭男さんである。そして、名古屋駅。バスの乗降口に向かう途中、後ろからA子さんが声をかけてきた。彼女が参加した！やはり主役がいないと寂しい。

11時ちょうど、前回断念した『鈴鹿馬子唄会館』からウォーク出発。前回消化出来なかった1日分を加え、4日分を3日で歩くのだ。標高388メートルの山道を上る・・・12時15分に鈴鹿峠に到着。ここで、これから『こうか』に下ると言われた。あの『甲賀』のことをこちらではそのように発音するのだそうだ。峠を下り始めると、雨模様になる。『坂は照るてる鈴鹿はくもるあいの土山雨が降る』という鈴鹿馬子唄の通りになってしまった。雨が強くなり、風もある。その中をひたすら歩く。海道橋を渡り、歌声橋を渡っていると、誰かが『ふるさと』を唄い出し、それが美しいコーラスになった。歌声橋はドーム状の屋根付き橋なので、音響効果と旅情がうまくマッチしていた。17時過ぎにゴール。19631歩であった。その日の夕食は信楽駅近くの『一水庵』ですきやきだ。寒かったので熱燗が美味い。宿泊ホテルはルートイン彦根。S氏の部屋に『歩くCALL会』のメンバーが揃う。」

前回は大雪で鈴鹿峠を歩けなかった。今回は無事に峠に上ったが、下りでは雨にたたられたようだ。そして、この日のハイライトは、何ととっても、歌声橋でのコーラスだろう。誰かが「ふるさと」を唄い始め、それがコーラスになるとは、まるで映画のワンシーンのようだ。それぞれの参加者の心が太い絆で結ばれているのではないか。僕は大いに感動してしまった。矢尾板さんはそれをわずか一、二行で実に淡々と語っている。

「2日目、昨日のゴールを9時半に出発する。この一歩々々で京都に近づくと感じながら歩く。途中B子さんが柑橘類をチョコレートで包んだお菓子を分けてくれた。おいしい。午後には横田の渡しの横田常夜灯の下に着く。リーダーの垣内さんが言う、みなさん、今日は3月11日、黙祷をしましょう、と。みんなその意味をすぐに理解した。時間はちょうど14時46分。あの東日本大震災はまさに今日のこの時刻に起こったのだ。その後津波などで大勢の人が犠牲になった。全員が頭を下げ黙祷する・・・亡くなった人達に自分達の気持ちが通じただろうか？・・・

A子さんは、Oさんに腕を支えてもらいながら、最後尾をよちよち歩いている。時折羽鳥タクシー

の客にもなる。それでも歩いているのだからすごい。添乗員の篠澤さんも最後尾を歩いているが、道端にお地蔵様を見つけると、必ず手を合わせる。尋ねたところ、特別に宗教心はないとのこと。自然に手が合うというのだから、見ていて気持ちがいい。今日は風が強く、体が冷える。15時44分ゴール。23089歩であった。夜は『水幸亭』で和食の懐石料理。ここで初めて宮崎の『へべす酒』を飲む。M夫妻が今日で結婚42年目とか。おこぼれでバースデイケーキをご馳走になる。ホテルに帰る途中、ドライバーの好意で彦根城を迂回する。ライトアップされていて遠目にも美しい。二次会は、最終ゴールの京都での宴会の出し物をネタにして、大いに盛り上がる。Mさんはウクレレを弾き、Oさんはピコ太郎、Sさんはトランプ、O子さんはヒラリー、と大仮装パーティになってしまった。

3日目。9時25分スタート。今日は好天に恵まれる。B子さんと肩を並べて歩いている時、皆勤賞ですか？と訊くと、以前1回腹痛でドタキャンしたことがあるとのこと。そういえばそんなことがあった。今月その分を自分の足で歩くのだそうだ。A子さんに劣らずすごい執念だ。眼を移すと、A子さんはOさんのエスコートなしには歩けない状態である。そういう自分も右足首が痛い。もう少しもう少しと我慢して歩き、ようやく石部宿に入る。ここは猿飛佐助の故郷である。『石部金吉』の語源でもあるらしい。草津に入り、『うばがもち』に立ち寄る。これは東海道三大餅の一つだ。ここでバックパッカーの大学生に会う。東京を発って19日目で、明日京都に入るという。そういう若者を見ると羨ましい。我々はもう足掛け3年も京都に向かって歩いている。16時にゴール到着。27309歩であった。京都の前の最後の難所を乗り越えて完歩。大いに満足する。その満足がこの苦しいウォークの対価なのだ。」

次回はいよいよ最終ゴールの京都である。メンバーの中には歯を食いしばって歩いているA子さんのような女性もいる。他のメンバーも矢尾板さんの満足感を共有しているのではないか。特に今回は、コーラスや全員黙祷といった印象的な場面の描写があって、中々映画チックだ。さあ、みなさん、京都までもう一息である。

【電計2018年10月号】

【題名：東海道53次ウォーク(24)】

「いよいよ最終回だ。2年半を費やした旅が終わる。季節は春、桜咲く古都へ向かう。7時20分発ののぞみ205号で一路京都へ。そして、バスで前回のゴールであった草津宿に。スタッフは、ウォークリーダーの山本さんと、添乗員は最後なので特別に篠澤さんと永森さんの2名、後方支援は羽鳥さんである。参加者は28名だ。11時スタート。立木神社、建部大社、瀬田唐橋を経て義仲寺へ。ここで『木曾殿と背中合わせの寒さかな』と詠んだのは芭蕉の門人・又玄(ゆうげん)であった。義仲に深い親愛の情を抱いた芭蕉の墓が義仲の墓と背中合わせに並んでいる。芭蕉は義仲の傍らに葬ってほしいと遺言していたのだ。戦は得意でも、その他のことはまるでダメであった義仲。芭蕉はそんな不器用な武士にことその他深く心を寄せていたのだろう。

今日のゴールである大津に入る。天候は晴れ、16.7キロ、24939歩であった。翌日はいよいよ京都へ向かう。途中にある逢坂の関は、相場山とも言われ、米相場を手旗信号で伝えた場所だそうだ。京都に年間90万俵に及ぶ米俵を牛車で運ぶために、坂道を石畳にし、さらに、轍(わだち)を作ってレール代わりにしたそうである。『これやこのゆくもかえるもわかれては知るも知らぬも逢坂の関』(蟬丸)が有名だ。さあ、京都への最後の峠の日ノ岡峠を越える。この道は民家が密集していて細道だ。ガイドの号令一歩皆無言で歩く。坂を越えた所で、B子さんから柑橘をチョコレートで包んだ甘いお菓子をもらう。ありがたい。

それから琵琶湖疎水記念館で一休みし、春爛漫の京都に。白川橋付近で羽鳥タクシーを下りたA子さんが合流。15時5分に京都三条大橋に到着した。そこには「東海道五十三次ウォーク完歩」の横断幕が張られていた。全員が鴨川の川原に下り、バンザイ三唱、いや、十唱する。そして、記

念撮影。2017年4月15日。14.3キロ、19250歩であった。

ザパレスサイドホテルに入り、東海道五十三次完歩パーティが開かれる。みなさん大いに盛り上がる。完歩者に賞状と記念品が贈られた。私もその一人だ。後方支援の羽鳥さんはこの旅の様子が雑誌(電気計算)に掲載されているのを知っている。彼は自主的に既刊分のコピーを全員に配っていた。私にマイクが回ってくる。『私がみなさんに来るサービスがあります。石にみなさんの名前を刻むことは出来ませんが、将来発行されるであろう雑誌に、みなさんの名を載せることは出来ます。もし、それがいやな方は申し出てください。その場合は28名の仲間とだけ書きます。』と話した。そのあと、2名の添乗員・篠澤さんと永森さんが、ロリコン衣装で『ペッパー警部』を熱唱。大盛況であった。そして、この日のパーティーの最後で驚いたことがある。A子さんがピンクのドレスで登場した。それに加えて、この日のために用意していた30枚のド派手な名刺を配ってくれる。赤い下地に白で自分の名前と住所が印刷されている！私はその裏を見て更に驚く。広重の京都三条の下絵の上に、何と大きく、道中、足が悪かった人、と印刷されていた。

その後、添乗員の篠澤さんから連絡があり、名前を出さないでほしいという人が現れたそうだ。

何はともあれ、ようやく無事に53次の旅が終わったのだ。矢尾板さんに送ってもらった京都の写真では、京都は実に春爛漫で、枝垂れ桜であろうか、満開の桜があちこちの名所に溢れていた。祝賀パーティの様子の写真もある。みなさん、晴れやかな表情だ。

「最後に話を締めくくろう。一元論とは、それぞれかけがえのないもので、それ自体美しい存在価値がある。例えば、世界に一つだけの花、とか。それに対して、この世には、区別・差別があるという二元論がある。例えば、男と女、金持ちと貧乏人、高い低い、幸せと不幸、等々。今回は旅の仲間とその二元論を重ねてみたのだが、そこから生まれたのがA子さんとB子さんの記述である。フィクションと思われてもかまわないが、私のその二元論的記述を神様はどう思われたろうか。とにかく、A子さんもB子さんも目標を達成した。そのために努力している姿が美しかったのだ。それ以前の人生に価値ありやなしや・・・」

矢尾板さんは自分の旅日記をそう結んだ。彼と、A子さん、B子さん、そして、28名の仲間がゴールした。更に、添乗員、ガイド、後方支援の人々が大いに活躍した。合計24回の「東海道53次ウォーク」はこれで完結である。矢尾板さん、ご苦労さまでした。

【電計2018年11月号】

【題名：東海道53次ウォークを終えて-1】

矢尾板さん、いや、彼を含めて、常に20名以上が参加した53次ウォークがようやく終わった。最終ゴールに着いたメンバー達は喜びもひとしおだったろう。最初のウォークからほぼ2年、参加者はよく歩いたものだ。僕自身に関していえば、歩くのは苦にならないが、他人と一緒にというのはどうもあまり好きではない。一方で、矢尾板さん達は、互いに、助け合い励まし合って歩き続けた。そこで、今回を含めて2回に渡り、「東海道53次ウォーク」への僕の感想を書いてみたい。

初めのうち、東京組は丸の内の丸ビル前で集合し、電車の中で横浜組と合流して宿から宿へとウォークを続けたのだ。原則として月一回とはいえ、決して楽ではなかった。それは矢尾板さんの「53次ウォーク」からよく伝わってきた。そこで、僕は改めて東海道53次のことをネットで調べてみた。大学受験時代は、各街道の大きな宿場くらいは覚えたものだったが、それが済むと53次のことなど思い出すこともなかったのである。さあ、敢えて53次の宿場を列挙してみよう。出典はWikipediaだ。

起点は江戸の日本橋。1.品川宿→2.川崎宿→3.神奈川宿→4.程ヶ谷宿→5.戸塚宿→6.藤沢宿→7.平塚宿→8.大磯宿→9.小田原宿→10.箱根宿→11.三島宿→12.沼津宿→13.原宿→14.吉原宿→15.蒲原宿→16.由比宿→17.興津宿→18.江尻宿→19.府中宿→20.鞠子宿→21.岡部宿→22.藤枝宿→23.島田宿→24.金谷宿→25.日坂宿→26.掛川宿→27.袋井宿→28.見附宿→29.浜松宿

→30.舞坂宿→31.新居宿→32.白須賀宿→33.二川宿→34.吉田宿→35.御油宿→36.赤坂宿→37.藤川宿→38.岡崎宿→39.池鯉鮒(ちりゅう)宿→40.鳴海宿→41.宮(熱田)宿→42.桑名宿→43.四日市宿→44.石薬師宿→45.庄野宿→46.亀山宿→47.関宿→48.坂下宿→49.土山宿→50.水口宿→51.石部宿→52.草津宿→53.大津宿。終点は京都の三条大橋。

以上が東海道53次の宿場である。この道中で、「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」という言葉が今もよく知られている。もともと、今では、大井川に橋が掛けられて、誰でも電車かバスで何の苦もなく超してしまう。どんなウォーク企画でも、実際に徒歩で川を渡ることはいらないだろう。徳川時代に大井川の水が溢れてしまったら、大名を含めて旅人は何日でも足止めを食ったという。おそらく梅雨の季節にそのようなことが起こったはずだ。ところが、現代の矢尾板さん達は、梅雨時でも、そのようなことを経験せずに歩くことが出来るのだ。

ちなみに、Wikipediaによると、徳川時代は、いわゆる旅籠が各宿場を合わせて3000軒ほどあったそうである。その中でも、七里の渡し港のあった宮(熱田)宿には247軒、その対岸の桑名宿にも120軒の旅籠があった。それだけの旅籠があれば、宿場は大いに賑わっていただろう。だが、諸大名の参勤交代が集中する頃だと、足軽などは緊急の仮小屋などに寝たのではないか？あるいは、各藩の家老同士が話し合っ、江戸を出発するスケジュールを調整していたのか？残念ながら、ネット上でも書店の立ち読みでも、信頼するに足る情報は得られなかった。

さて、この記事を書いているうち、僕は受験時代にその名を覚えた早飛脚のことを思い出した。それもネットで調べてみると、幕府のお抱え飛脚なら、川止めがなければ、交代しながら、江戸-京都間126里を、昼夜を問わず60時間から70時間で走ったという。それを24時間で割れば、2日半から3日なのだ。当時としては、まさに新幹線並みのスピードだったろう。では、庶民はどうだったのか？徒歩で平均15泊で歩いたそう。幼い頃の僕は、東映の時代劇が好きで、よく映画館に通った。その映画の中で、東海道53次を歩く尻はしよりの旅人の姿をよく見たのを覚えている。そして、彼らは例外なく日除けの編み笠をもっていた。もともと、それは男の旅人の姿で、女の旅人は、もっと小さな折りたたみ式の編み笠を被り、杖をもっていた。一方、現代の矢尾板さん達は、男女とも、スニーカーにナップサック、あるいは、リュックサックという姿だ。日除けの帽子を被っているメンバーも少なくない。そういう写真を、ウォークの途中でLINEに送ってもらったり、後日に僕のPCに送ってもらったりしていたので、その様子がよく分かった。そして、矢尾板さんは歩いた歩数を万歩計でレポートしている。毎回ほぼ一万歩から2万歩くらいは歩いている。中々の強行軍だが、彼自身が語ってきたように、ある達成感がそこにある。その万歩計は現代の発明品だが、徳川時代の旅人がそれを見たら、どんな顔をするだろうか？実は万歩計は日本で発明されたもので、計器の中にある磁石が歩く振動で揺れ、その磁気をセンサーが感知してカウントするのだそう。1975年に山佐時計計器という会社が初めて作ったという。それも、徳川時代に発達した街道と、そこを歩く人々の数が大いに増え、いわば、徳川時代から現代に至る「歩く文化」がその発明の底にあったのかもしれない。矢尾板さん達は、徳川時代の旅人の遺伝子を継承しながら、「歩く文化」を守り続けたのではないか？ほんのひとときだが、僕は勝手にそんなおかしな思いを巡らして楽しんでた。

矢尾板さんと「53次ウォーク」のメンバーのみなさん、ご苦労さまでした。とりあえずそれが今回彼らに贈る僕の言葉だ。

【電計2018年12月号】

【題名：東海道53次ウォークを終えて-2】

今回は矢尾板さんの「53次ウォーク」への2回目の感想である。前回は東海道53次の宿場をすべて列挙したが、どの宿場でもその痕跡を何らかの形で留めているというのが実情であろう。矢尾板さんがLINEやPCに送ってくれた写真には、「xx宿跡」などと石に刻まれた碑文ばかりであった。

実は、我が町・大宮は、中仙道の宿場町だった。しばらく前まで、ガラス戸に「xx旅館」と書かれた小さな旅館が中仙道沿いにあった。それも今は姿を消してしまった。東海道沿いの旧宿場町でも似たような状態にあるのではなかろうか。僕は時折中仙道でやはり「中仙道ウォーク」とおぼしき中高年男女の集団を見かけることがある。みんな生き々々としていて表情が明るい。おそらく矢尾板さんのグループも似たようなものではなかったろうか。

さて、矢尾板さんの「53次ウォーク」には、A子さんとB子さんの二人の女性が出てくる。特にA子さんの話題が少なくなかった。僕は矢尾板さんにその二人の女性の顔写真を送ってもらいたかったが、何故かそれはついに実現しなかった(苦笑)。そこで、僕は、二人を違うタイプ、例えば、A子さんには色っぽい中年女性、B子さんには上品な中年女性、といったイメージを勝手に与えて楽しんでいた。顔写真で見えていないだけに、僕の想像がそれだけ膨らんだことは確かであった。ひょっとしたら、彼女達は矢尾板さんの生涯の友になるかもしれない。「ウォーク」で互いに助け合ったり、励まし合ったりしたのだから、心のつながりがそれだけ強いものになるだろう。

一方、矢尾板さんはその「53次ウォーク(20)」の中で、「歩CALL(あるこおる)会」という飲み会を作ったことを語っていた。「歩くのをCALLする」に「アルコール」をかけた合成語だそうだ。特に、「ウォーク」が京都に近づくにつれ、1泊2日とか2泊3日のスケジュールになったので、酒好きが声をかけ合ってホテルで飲むようになったのだ。矢尾板さんによると、毎回大いに盛り上がったようである。おそらく、互いにニックネームで呼び合ったりして、思い切り楽しいひとときを過ごしたのだろう。そのような場の酒宴は実にいいものだと思ふ。それに、「53次ウォーク」参加者は、中高年ばかりなので、共通の話題が出来やすかったのではないかな。みんないい気分で飲んで騒いでぐっすり寝込んだのだろう。

ところで、僕は毎回矢尾板さんがリポートしていた添乗員、ガイド(正式にはウォークリーダー)、ドライバー、後方支援という人材に無関心ではいらなかった。「53次ウォーク(10)」で矢尾板さんが書いていたが、「ウォーク」は、旅行会社の企画ツアーなので、会社が特に添乗員という付き添いをつけるのが旅行業法上の義務なのだという。では、ガイドはどうなのか?これは派遣会社の派遣社員だそうだ。後方支援に法的義務はないようだが、実際上はやはり必要な役割を担うだろう。

ツアー中に落伍者が出て、会社としてそのまま放っておくことは許されまい。そのために後方支援者があり、歩けなくなった者は車に乗せて移動する。実際に矢尾板さんの「53次ウォーク(21)」は、歩けなくなったA子さんが車に乗せられたと語っていた。これが男の参加者だと、意地があって、おれはもうダメだとは中々言えないのではないかな?ただ、いよいよという時には、足を抱えて降参だろうが、少なくとも矢尾板さんはそのような男の参加者のことは語っていない。

特に、添乗員は、旅行会社の社員で、ツアーを引率指揮して安全と日程を確保する役割を担っていた。自ら弱音を吐いて後方支援の世話になることなど許されない存在だ。とにかく、歩けなると言わんばかりに、参加者を元気づけなければならぬだろう。仕事とはいえ、苦勞が忍ばれる。

矢尾板さん自身はといえば、最後の最後まで力強く歩き抜いた。その達成感はいかばかりか?そのうち彼と会う機会があったら、それを是非尋ねてみたいものである。字数の限られた旅日記では語り尽くせないものがあるだろう。

これまで数々の道中写真を送ってもらったが、いずれもユニークなものだった。その中に宿場名物の土産物があった。例えば、草津宿の「うばがもち」。矢尾板さんはそれを僕に送ってくれた。とてもおいしいおもちであった。その味を端的に形容するとしたら、からっと甘い、とでも言えるだろうか。僕自身が行かない限りは、二度と口に入らないおもちである。送られてきた店の写真を見たが、粋なのれんのかかった小さな店構えだ。草津宿は東海道と中仙道が交差する宿場だったというので、多くの旅人に愛されたもちだったのだろう。そのような食文化に邂逅できるのも「53次ウォーク」の醍醐味かもしれない。

ともあれ、矢尾板さんはその長い「ウォーク」を無事に終えることが出来た。A子さんもB子さんも

何とか歩ききった。彼女たちにも意地があったのだろう。

矢尾板さん、「53次ウォーク」に参加したみなさん、ご苦労さまです、そして、おめでとう、僕は改めて心からその言葉を贈りたい。